

安行1式土器型式構造論基礎考

大塚 達 朗

序

筆者は数年前安行2式の波状口縁深鉢形土器の大波頂部直下に位置する三角形区画帯に着目し、その中から安行3a式の標本土器である東京都小豆沢出土の深鉢形土器の口縁部紋様帯の三叉紋が発生する旨を述べたことがある(大塚 1981)。この作業に於いて、山内清男氏によって安行3a式の指標的土器である小豆沢出土の深鉢形土器の安行3a式たる所以を筆者なりに確認出来たと思う。当該土器を不当に扱って来た他の研究者とは大分理解の水平を異にする筈である。因に、この関東三叉紋は東北晩期初頭大洞B式にも出現していくと考えている(註1)。

その際前提とした手続きの一つは、波状口縁深鉢形土器に見られる三角形区画帯の系統発生的な関係をもって安行1式、同2式を弁別することであった。すなわち、「岩井段階以後安行1式終末に口縁部紋様帯と頸部紋様帯が合体して三角形区画が登場してくるが、これが独立する段階が安行2式である」(大塚 1981 17頁)と規定したのである。

その後、加曾利B式土器が後の研究者によって理解に齟齬を来している問題を別決する機会が在り、必要から註の中で安行1式の細分内容の一端を開陳しておいた(大塚 1983 註54 224頁)。型式学的な観点としては、千葉県岩井貝塚(大町・片倉 1937)の平口縁深鉢形土器と千葉県西広貝塚(米田・小川 1981) No.204 大形ピット出土の波状口縁深鉢形土器との紋様帯上の関係に立脚し、それ以前とそれ以降とを分離して(古)・(中)・(新)と三細分するものである。それは取りも直さず細分中に安行2式の波状口縁深鉢形土器が有する三角形区画の祖型が登場してくる過程を睨んだ案であるが、具体的な例については極めて少数しか言及していない。

一方、上記のような筆者の細分案とは別に、安行1式の細分について、いく人かの論策に接する機会があった(鈴木 1980 a, b, 1981, 鈴木他 1982, 長岡 1981, 1982, 宮内 1980)。鈴木氏の曾谷式研究及び宮内氏と長岡氏の安行1式研究は安行1式理解に参考となる点が多く敬意を表すべきかとも思うが、各氏に対して基本的な問題に於いて見方の相違を痛感した。彼らの思考法に共通しているのは、岩井貝塚の土器群を一まとまりの階梯として評価することであり、その点は筆者と立場を近くするものと思われ賛同するにやぶさかでない。が、しかし、当の岩井貝塚の資料について「安行1—2式」とし、それ以前を「安行1式」と区別するという遣方に対しては全く反対

であった。その理由の第一は、学史的に鑑みて安行1式とはまずもって岩井貝塚の土器群が標準となつて命名提唱されたのであり、それに別の呼称を与えることは頗る妥当性を欠くこととしか思えないということである。もう一つの理由は安行1式の細別にかかわる土器型式学上の視点を異にすることから由来するものである。例えば、紋様帯の理解に乏しい鈴木氏のように「高井東5式」からの影響で岩井段階の波状口縁深鉢形土器の頸部に紋様帯が登場していると思われ、その事象が区分の根拠となると主張することに対しては無理があるとしか考えられない。つまり、単純なことであるが岩井段階に始めて波状口縁深鉢形土器の頸部に紋様帯が登場するとは考えられず、かつ、この紋様帯の由来を「高井東5式」には求められないということが型式学上の反対理由である。

それに対し先に触れた筆者の三細分案の具体的視座では、平口縁深鉢形土器の頸部紋様帯、胴部紋様帯が時期的変遷の中で波状口縁深鉢形土器へ転写されるという親和的關係（註2）の在り方を基底に据えて、かかる親和的關係から生成する波状口縁深鉢形土器の形象を区分することによって、（古）・（中）・（新）と分けたのである。例をあげると、学史的に著名な千葉県犢橋貝塚の波状口縁深鉢形土器（図版Ⅰ—3）は岩井貝塚例よりは古くその意味で（古）式に含め、（中）式は岩井貝塚の資料（図版Ⅰ—4）が判断の基準となり、（新）式は岩井貝塚では不明であるが、明確に口縁部紋様帯と頸部紋様帯とが合体している埼玉県石神貝塚（小田他 1975）や埼玉県寿能泥炭層遺跡（大塚他 1984）出土の波状口縁深鉢形土器（図13—1・3）を充当しているのである。

小稿は、筆者のかかる安行1式三細別（古・中・新）案の基本的な内容及び三細別中に盛り込まれている岩井貝塚の土器群の意義、つまり安行1式の変遷の構造的な理解につながる把握について述べることを目的としている。そもそも、いたずらに異を唱えるだけでは研究者としての礼節を失すのではとひたすら愁えることにより、現在手掛けている関東地方縄紋時代後晩期土器型式（加曾利B式・曾谷式・安行式）研究の一部でありその中間報告にすぎないが、敢て拙論を提出するという挙に及んだ次第である。その意が汲まれることがあれば良しとすべきであろう。

まずは、学史的検討から「安行1式」の内容がもたらす問題を見ることにしよう。

1. 学史上の安行1式

1940～41年にかけての『日本先史土器図譜』第7輯・10輯による安行1, 2, 3a, 3b, 3c式という細別が現在の安行式の細別の基本的な案となっている。周知のように、このような細別は関東地方での所謂薄手式土器の細別型式の確定と亀ヶ岡式土器との並行關係の論定という編年作業によつてもたらされたのであるが、いくつかの紆余曲折があったようである。

1934年の「真福寺貝塚の再吟味」に於いて山内清男氏は、亀ヶ岡式を伴う安行式とそうではない安行式とは何かの検討を行ない、それまでの安行式を安行1式、同2式、同3式（図1）と細分する案を提示している。今ここで俎上に載せる安行1式については亀ヶ岡式以前であることが指摘され、そして「下総岩井貝塚の土器が、この式の標準となつて居る」（山内 1934 907頁）と述べていることが重要である。ちなみに、岩井貝塚の調査報告は1937年に上梓された（大町・片倉 1937）。

図版I—4～6, 図2の土器がそれである。

ここで、真福寺、岩井貝塚両遺跡の土器を比較してみよう。真福寺貝塚例(図1—1～2)は粗製の紐線紋土器である。「安行1の紐線文土器は形が違って居る(安行2式に比して——引用者註)。紐線は口の外側と、くびれた頸部に加へられる。口部は外方に肥厚しない。紐線は隆起帯のもの少く、点と溝からなるものが多い。また点許りのものもある。これは安行2には全く無いらしい」(山内 1934 908頁)と概括されているが、岩井貝塚例についてもそうである。図1—3～6は精製である帯縄紋土器で、同3は4単位の波状口縁深鉢形土器の波頂部付近の破片であり、頂部には孔が貫通して四段の帯縄紋をもち、これらは岩井貝塚の例(図2—2～3)と共通するが、岩井貝塚の波状口縁深鉢形土器が頸部に紋様帯をもつのを特色と見做した場合、真福寺貝塚例ではその点は残念ながら検討できない。図1—4～5は平口縁深鉢形土器で、岩井貝塚例(図2—4)と同様に口縁部二段の帯縄紋の下に無紋部を貫入させて下向きの磨消弧線紋が配されている。岩井貝塚には他に口縁部二段の帯縄紋直下に同趣の下向きの磨消弧線紋が接続する例がある(図2—6)。ただしこの土器では弧線紋端部は口縁部に配される突起下には必ずしも明確に対応していないことに留意すべきであろう。というのは、後で触れるが口縁部二段の帯縄紋下に直接付される磨消弧線紋の端部が口縁部突起と比較的明確に対応する例があるからである。さらに、平口縁深鉢形土器について言えば、岩井貝塚には他に口縁部に三段の帯縄紋をもつ例がある(図版I—4)が、真福寺の資料ではその仲間の有無は検索出来ない。図1—6はタスキ状の帯縄紋をもつ瓢形土器であろう。岩井貝塚では図2—8・11が類例である。

真福寺貝塚、岩井貝塚の資料を比較してみて岩井貝塚段階を考えるには真福寺貝塚にも見られる器種及びその特徴をまず基本と考えるべきであろうと考える。

岩井貝塚の報告が出された年、山内清男氏は縄紋土器研究の方針を語った著名な「縄紋土器型式の細別と大別」で興味ある発言をしている。

すなわち、「安行式も亦甲野氏によって二つに区分されたが、大町片倉氏の岩井貝塚の資料によって更に一型式即ち安行1式の区分あることが判明した。又私は真福寺貝塚の資料によって不明の一型式の存在を予想したが、最近下総曾谷貝塚の発掘によって、この型式の全貌が明になった。この式は加曾利B式、安行式間に介在すべきものであって、両型式に近似する特徴を持ち、今日まで我々はその一部を加曾利B式、或は安行1式と不用意に鑑定して居ったのである」(山内 1937 30頁)と語っているのである。要するにこの一文は曾谷式という土器型式の内容が明確になったことを述べている一方、そのことで安行1式の範囲がほぼ定まったことを暗に述べているのである。当然、岩井貝塚の資料とは少し様相を異にするが曾谷式とは弁別すべき土器が安行1式として存在することを示唆していると捉えるべきなのである。

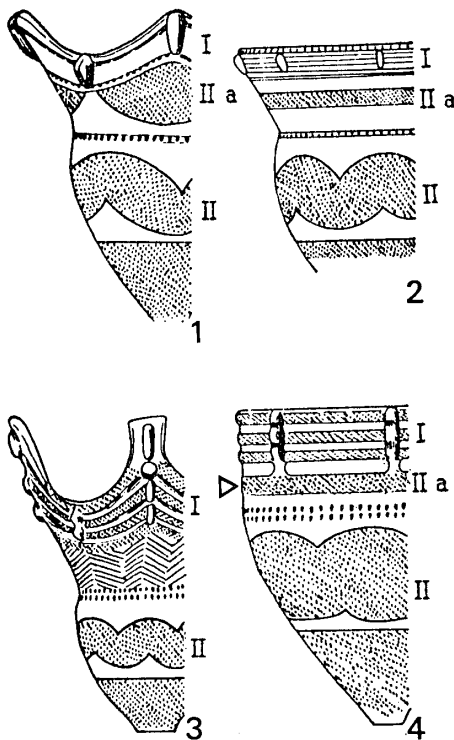
1940年に上梓された『日本先史土器図譜』第7輯の安行1式は正にそのような構成を示しているのである。概括して曰く「安行1式はその直前の型式即ち曾谷式と甚だ近似し、相互に区別し得ないものを含んで居る」となるのである。粗製土器の解説で図版I—1～2について、「二例も恐ら

く同型式（安行1式——引用者註）であろうが、曾谷式にも類例があり、鑑別は屢々困難である」と説明があり、一方、口縁部の外反度が少ない岩井貝塚の二例（図版Ⅰ—5～6）については、「安行1式に伴う稍粗製の土器の代表的な例である（傍点引用者）」と規定されている。前二例は正に曾谷式直後の安行1式、後者は曾谷式より型式学的に距離のある安行1式を提示しているのである。精製の波状口縁深鉢形土器である犢橋貝塚例（図版Ⅰ—3）は頸部に紋様帯を有しない点で型式学的に岩井貝塚例と異なるが、口縁部の四段の帯縄紋や波頂部にある貫通孔などは岩井貝塚例や真福寺貝塚例に共通するので、犢橋貝塚例が古相を示すと思われる一方、曾谷式直後の安行1式という捉え方は出来ないのである。それはともかく、この器種については「安行1式の深鉢型の一範型」という位置付けが与えられている。他方、岩井貝塚の平口縁深鉢形土器（図版Ⅰ—4）についても「適例ではないが安行1式の深鉢形規範的形態の一つに属して居る」という評価がある。ここで先に触れた真福寺貝塚と岩井貝塚との比較を踏えるならば、岩井貝塚資料を基準とした安行1式の平口縁深鉢形土器の中で規範的形態として適例なものは図2—4・6の如き深鉢形土器があげられねばならないであろう。

少しまとめるならば、『日本先史土器図譜』の安行1式の重要性は、器種構成上の整理・評価がなされている点と更なる細別の可能性を内包した標本構成になっている点であろう。従って、安行1式は学史的に見てくるならば、そもそも型式設定時の内容に細分の必要を秘めていたと考えるべきであろう。

基本となるのは、岩井貝塚のような土器群とそれ以前に如何なる土器群が位置するかということでの細分であることがわかる。その意味で、先にあげた研究者達が岩井貝塚の土器群に注意を払うこと自体には賛同する訳であり、筆者自身もこれを基軸に据えて細分を考えているのである。

さて、戦後1964年に山内氏は紋様帯系統論の中で安行1式を取り上げている（山内 1964）。この場合、『日本先史土器図譜』の安行1式二例（図版Ⅰ—3～4）について紋様帯上の解釈がある（挿図1）。まず、平口縁深鉢形土器について見るならば、曾谷式から岩井貝塚の安行1式（挿図1—1～2・4）まで紋様帯Ⅰ（＝口縁部紋様帯）・Ⅱa（＝頸部紋様帯）・Ⅱ（＝胴部紋様帯）を有しその変遷が連続的なものと捉えることが出来るであろう。それに対して、平口縁深鉢形土器と違ってⅡa紋様帯を持たずⅠ・Ⅱ紋様帯しか有しない犢橋貝塚の波状口縁深鉢形土器（挿図1—3）は岩井貝塚の同種深鉢形土器（図2—1～3）とも異



挿図1 曾谷式と安行1式の紋様帯
曾谷式（1：江原台，2：西ヶ原貝塚）
安行1式（3：犢橋貝塚，4：岩井貝塚）

なり、岩井貝塚の当該土器をどう理解するかが問題となる。明らかに犢橋貝塚の波状口縁深鉢形土器と岩井貝塚のそれとは紋様帯上不連続である。そこで、一つの考え方として岩井貝塚の波状口縁深鉢形土器の頸部に紋様帯が登場するのを他型式からの影響と見ることも可能かもしれないが、もう一つの視点として平口縁深鉢形土器に見られる紋様帯上の連続性に着目して岩井貝塚の土器を検討することも有り得るだろうと思うのである。筆者はこの後の視点に立脚している次第である。畢竟、「規範的形態」である平口縁深鉢形土器の連続的型式変遷がより例証されるならば、その変遷を内包する安行1式の細別にそれぞれ別々の命名をなす必要はないであろうという立場になるのである。そして、その「規範的」所以は以下の考究で闡明となろう。

では次に、岩井貝塚の土器群に対して如何なる型式学的限定性及び評価を与えているか明らかにしておく。

2. 岩井貝塚段階の形象

一口に岩井貝塚の段階と言ってもどの程度その内容に時期的限度性を与えることが出来るだろうか。如何なる土器の組み合わせを一つの階梯として把握すべきなのであろうか。この点が明確にされなければ細別の基準足り得ないのである。

そこでまず岩井貝塚出土の波状口縁深鉢形土器を検討して見ることにする。

岩井貝塚の波状口縁深鉢形土器三例(図2—1~3)は細かく見ていくと様相の違いが実は目につくのである。ただし、これらの土器に於いて、波頂部形態が角頭状を呈するか尖頭状か、あるいは紋様帯上に縄紋が施紋されるのか刻紋が付されるのかはヴァリエティと考えている。

ここで問題とする大きな差異とは、それぞれの土器の頸部括れ部直上(註3)の様相の違いである。図2—1は頸部括れ部直上に帯縄紋が一本ある。図2—2は同部位に二本の帯縄紋をもっている。図2—3は同2と似て、頸部括れ部直上にこの場合は二段の刻紋帯もつが、下段の刻紋帯の方には小突起が付いている点が特徴である。あたかも、図2—1→同2→同3という変遷を辿るのかのように型式学的に思える。つまり、図2—1のような頸部括れ部直上に一本の紋様帯をもつ土器に新たにもう一本の帯縄紋が重畳し、そして、そのようにして出来た頸部紋様帯に今度は小突起が付されていくかのように思えるのである。

波状口縁深鉢形土器がそれぞれ時期差をもつ可能性があるのならば、他の土器群はどういう位置を占めるのであろうか。この問題を巡って岩井貝塚にはもう一つ重要な土器がある。それは学史的検討の項で既に触れた三段の帯縄紋を口縁部にもつ平口縁深鉢形土器である(図版I—4, 挿図1—4)。細かく観察すると、口縁部紋様帯(=I)と頸部紋様帯(=II a)の間に) (状の沈線紋が配されているのが窺える。宮内良隆氏はこの土器とその紋様に着目して、「平縁深鉢形では岩井例のI文様帯とII a間を沈線によって区画連結する段階があるように思われる」(宮内 1980 400頁)と指摘しているのは重要であろう。岩井貝塚段階を考える時にこの平口縁深鉢形土器からの評価もなされなければならないであろうと考えている。

千葉県西広貝塚 No. 204 大形ピット出土の一括資料中には、岩井貝塚の波状口縁深鉢形土器と平口縁深鉢形土器の様相を統一的に理解させてくれる土器がある。

図3-1の波状口縁深鉢形土器が正にそれである。この土器は口縁部に四段の帯縄紋をもち、尖った頂部を有し、口縁部と頸部の紋様帯との間には、犢橋貝塚の土器(図版I-3)の頸部に見られるような縦方向に帯状に方向を変えて施紋される条線紋が圧縮されたような形状になって施紋されている。さて、頸部の紋様帯であるが、頸部括れ部直上に帯縄紋が一本あり、さらにその上に(図でははっきりしないかもしれないが別の面を見ればよくわかるのである:図版II-4を参照せよ)やはり帯縄紋がもう一本巡っている。ここで重要なのは、この頸部紋様帯と口縁部紋様帯との間に)(状の沈線紋が付加されていることである。筆者は、)(状の沈線紋と直下の帯縄紋との組み合わせに着目して、岩井貝塚の平口縁深鉢形土器(挿図1-4)に見られるようなII aの紋様帯が転写された結果と考えている。つまり、この西広貝塚例は岩井貝塚例(図2-1)のような一本の帯縄紋によって構成される頸部紋様帯に新たに平口縁深鉢形土器である岩井貝塚例のようなII aの紋様帯が転写されたものであり、その間の事情は)(状の沈線紋の存在が如実に物語っているであろうと思うのである。

如上の型式学的分析によって、波状口縁深鉢形土器である岩井貝塚例(図2-1)は同器種の西広貝塚例(図3-1)の直前に位置すると思われ、この西広貝塚例と平口縁深鉢形土器である岩井貝塚例(図版I-4)とは同時期と考えられるのである。

そこで、型式学的に分析し摘出した西広貝塚 No. 204 大形ピット出土の波状口縁深鉢形土器と岩井貝塚のII a帯縄紋を有する平口縁深鉢形土器の同時期性を前提として、他器種についても西広貝塚 No. 204 大形ピット出土の一括資料と岩井貝塚の土器群とを比較して見ることにする。

学史的検討の中で明確になった主要な器種である二段の帯縄紋を口縁部にもつ平口縁深鉢形土器(図2-4)に対応する西広貝塚例は図3-2である。やはり頸部紋様帯の磨消弧線紋が口縁部紋様帯から分離しているのである。図3-5は口縁部に三段の帯縄紋をもち、胴部に条線紋を配する謂ば砲弾形の深鉢形土器である。この土器では口縁部紋様帯下に一本帯縄紋が巡っている。岩井貝塚では図2-7がこれに対応する器種である。口縁部に三段の帯縄紋を配しているのが窺える。図3-4は胴部に最大径をもち、括れ部をもたずにそのまま内湾した口縁部に至る深鉢形土器である。胴部にはタスキ状の入組紋をもち、口縁部に三段の帯縄紋が配され、口縁部と胴部を区画するかのよう沈線が一周し、その上に帯縄紋が一本巡っている。この器種に対応する岩井貝塚例は図2-10であろう。

ところで、岩井貝塚の平口縁深鉢形土器には頸部紋様帯の磨消弧線紋が口縁部紋様帯から分離していない例(図2-6)がある。これについてはどう考えるべきだろうか。同趣土器である西広貝塚の安行1式例(図版II-5)についてはNo. 204とNo. 213の大形ピットから出土している破片が接合している個体であることが指摘されている(米田 1983)。No. 213大形ピット出土の土器を実見して見ると、No. 204例(図3-2)と同じ形象の別個体土器が出土していることが確認出来

た(註4)。それらを考え合わせると、西広貝塚例(図版Ⅱ—5)はNo.204大形ピットの一括資料と同時期と考えられるであろう。しかし、岩井貝塚例(図2—6)も同じ位置付けが出来るかとなると問題があるようである。西広貝塚二例・岩井貝塚例(図3—2, 図版Ⅱ—5, 図2—4)があまり外反しない口縁部をもつことで共通しているが、問題の岩井貝塚例は口縁部が外反する器形を呈する点で異なっている。また、この岩井貝塚の土器と西広貝塚例(図版Ⅱ—5)の磨消弧線紋を比較すると、西広貝塚例の方がより下位に下向きの弧線紋が位置しているので、それも考慮に入れるならば、岩井貝塚のこの平口縁深鉢形土器はより古い別時期に位置付けるべきであろう。

図3—3は岩井貝塚の土器中には見い出せないが、加曾利B式以来連綿とした変遷の中で登場して来る土器で、その重要性の一端は既に説いておいた(大塚 1983 193頁—196頁)。また、菅谷通保氏が西広貝塚を中心とした該種土器の集成を行なったことで、安行1式期内での変遷及び変異がより明らかになって来ている(菅谷 1983)。その重要性に鑑みて、特に注意を喚起する意味から、“安行式西広型土器”と仮称しておくことにする。後で触れることがあろう。

所謂瓢形土器は西広貝塚 No.204 大形ピットからは検出されていない。他方、岩井貝塚には三種類の該器種土器が見い出されているが、これらのうちどれが西広貝塚 No.204 大形ピット一括資料に並行するかは保留しておく。

以上は、筆者の唱える“岩井貝塚段階”を構成する主要な深鉢形の精製土器の器種として位置付けるべきものと考えている。先に見た、学史的に呈示された該期の器種構成に新たに加えられた器種もある。さらに加えなければならない器種はまだある(それについては後で触れたい)。通覧するならば、実に様々な形象をもつ土器が一堂に会していることがわかるが、この段階になって始めて登場する器種はないように思えるが、どうであろうか。ところで、この岩井貝塚段階の最大の意義は、波状口縁深鉢形土器の頸部紋様帯に更に紋様帯が重畳した土器が登場することであると考えている。そして、それは平口縁深鉢形土器の頸部紋様帯(Ⅱa)が転写されるという親和的關係によるのである。理論的にはⅡa弧線紋が転写される例も当然存在する筈であるが、現在の資料からは判然としないが、筆者の見解の正しさを補強するので気になる。御教示を願う。

ここでいくつかの検討課題が出て来る。一つは、平口縁深鉢形土器と波状口縁深鉢形土器との親和的關係がこの段階に突然出現したのか否か、つまり波状口縁深鉢形土器の存在様式と平口縁深鉢形土器の存在様式間にどのような親和的關係が有るかを追究することである。もう一つは、波状口縁深鉢形土器の頸部紋様帯に小突起が付く例について、先に図2—2→同3という変遷を仮りに考えて見たが、その吟味が残っている。さらにもう一つは、波状口縁深鉢形土器に於いて頸部紋様帯の重畳が出現した以後、それと口縁部紋様帯とが合体し、次にその部分が独立する(これが安行2式)と型式変遷が追えるが、その一見単純そうな変化の実態を解明することであろうと考えている。

安行1式という土器型式に於ける基本的な問題とは如上の点に尽きるであろう。それを解決した上で始めて多種多様な土器群を内包する安行1式全体及び異系統土器を含めた安行1式期の時代性を正しく理解する視点が得られると思う。本稿は正にその基本的問題に限定して取り組んでいるの

であり、又、筆者の標榜する土器インダストリー論の基底的研究に係わる。

3. 岩井貝塚段階への道程

まず、平口縁深鉢形土器の変遷から考えて見ることにする。

先に学史的検討で触れたのであるが、曾谷式の直後の安行1式として粗製土器二態（図版Ⅰ—1～2）が扱われていた（図版Ⅰ—2は紐線紋土器の仲間ではない）。安行1式の最も古い部分を考える場合、これらとどのような精製土器が組み合うかを探索することは、曾谷式の基準資料が完全には呈示されていない現在、一つの便法として認められるであろう。

西広貝塚 No. 210 大形ピットからは図版Ⅰ—1～2と同趣の土器が出土している。図版Ⅱ—2はその中の一つである。図版Ⅰ—2と酷似していると言えよう。さらにこの大形ピットからは平口縁深鉢形土器（図版Ⅱ—1）が検出されている。この深鉢形土器は口縁部に二段の帯縄紋をもち、直下に磨消弧線紋を有している。下向きの弧線紋の端部は口縁部の突起に対応するような位置に来ている。さらにその下、頸部括れ部直上には帯縄紋が一本巡っている。胴部を見るとそこには磨消連弧紋が配されている。器形を見ると、頸部括れ部から口縁部にかけて直線的に外反するのを特徴としている。

千葉県曾谷貝塚D4号住居址床面出土の土器にも平口縁深鉢形土器（図4—17）がある（堀越他1977）。上記の西広貝塚例と同様に直線的に外反する口縁部を有し、口縁部には二段の帯縄紋があり、口縁部に付く突起下に端正な弧線紋の端部が対応している。西広貝塚例と大きく異なるのは、頸部括れ部直上には紋様帯がないことである。

西広貝塚例と曾谷貝塚D4号住居址床面土器は、直線的に外反する口縁部をもち、二段の帯縄紋が口縁部に配され、その口縁部にやや突出した形状の小突起が付され、それに対応するかのように口縁部直下に弧線紋が描かれるなどの共通性から同時期とと思っているが、頸部括れ部直上の様相は一方が帯縄紋をもち他方はそれをもたないなど明確な相違を有している。

器形、口縁部直下の弧線紋などで上記二例と共通する他の土器として良好な例がまだある。千葉県千代田遺跡（八幡他1972）の二例（図9—1・4）がそれである。やはり一方は頸部括れ部直上に帯縄紋があり、他方にはそれがないのである。このように見て来ると安行1式の最も古い段階で頸部括れ部直上に帯縄紋をもつ場合ともたない場合があると考えらるべきと思う。今仮りに頸部括れ部直上の紋様帯に対し「Ⅱb」と記号付けをすると、千代田・西広貝塚例（図9—1，図版Ⅱ—1）はⅠ—Ⅱa—Ⅱb—Ⅱ類型に、曾谷貝塚D4号住居址床面土器と別の千代田例（図4—17，図9—4）はⅠ—Ⅱa—Ⅱ類型に分けられる。そして、類型分けとは別にⅡa紋様帯の紋様で見ると、これらはⅡa弧線紋系土器とも呼べるであろう。更に、これらに並行してⅡa紋様帯に帯縄紋をもつ系列が存する。この分類法は（長岡1981）に近い。埼玉県富士塚前遺跡（市川他1980）の平口縁深鉢形土器（図9—2）がその好例である。器形上の特徴はこれまでの例と同じで、この場合は頸部括れ部直上に帯縄紋が巡っているので、謂ばⅠ—Ⅱa—Ⅱb—Ⅱ類型に相当する。

少し要約すると、安行1式の最も古い段階では、直線的に外反する口縁部をもつ平口縁深鉢形土器にⅠ—Ⅱa—Ⅱb—ⅡとⅠ—Ⅱa—Ⅱと言う類型別があり、Ⅱa紋様帯に配される紋様に弧線紋系と帯縄紋系の別があるのである。Ⅱa弧線紋系の場合Ⅰ紋様帯に密着した形で配され、Ⅱa帯縄紋系の場合Ⅰ紋様帯から間隔をおいてやや下方に位置している。それぞれのⅡa紋様とⅡaの紋様の配置の仕方は曾谷式の伝統を継承していると見て取れるであろう(挿図1参照)。また、Ⅰ—Ⅱa—Ⅱ類型のみならず、Ⅰ—Ⅱa—Ⅱb—Ⅱ類型も前代からの伝統であるが、曾谷式期の問題は別稿にて扱うことにする。

この安行1式の最も古い段階から岩井貝塚段階へと至る平口縁深鉢形土器の変遷を先に概観すると、器形上では口縁部の外反度が低くなり直立近く立ち上るようになる。口縁部紋様帯に付される小突起は突出した形状から扁平な形状へと変わって行く。Ⅱa弧線紋系では、口縁部紋様帯に密接する弧線紋が突起下の口縁部帯縄紋付近で連結するのではなく下方へ下ったところで連結して行く形状の弧線紋となる。そして、もう一つ別の変化として、Ⅱa弧線紋が口縁部紋様帯から分離してしまう系列が出て来るのである。Ⅱa帯縄紋系は量的に多くないようであるが、Ⅱa弧線紋が口縁部紋様帯から分離する現象と関係があるように思える。この問題については後で詳述する。二段の帯縄紋を口縁部紋様帯にもつ例の他に、三段の帯縄紋を口縁部にもつ土器も出現して来る。

以下、遺構単位のもつ資料について平口縁深鉢形土器の具体的な様相を紹介し、次に類型別の様相、そして波状口縁深鉢形土器の変遷をまとめる。

安行1式最古段階の次に古い段階は以下の遺構群の資料を基準に考えられるであろう。

曾谷貝塚D4号住居址覆土中の平口縁深鉢形土器の一例(図4—9)はⅡaの弧線紋が口縁部紋様帯から分離している。同7は分離していない。同3はⅡa弧線紋が口縁部紋様帯から分離しているのか否かはわからない。床面土器(図4—17)に比べると、これらは口縁部の外反の仕方がいく分変わって来ているように思える。図4—1は口縁部に三段の帯縄紋をもつだけの波状口縁深鉢形土器である。同5は口縁部を欠損しているが波状口縁深鉢形土器と考えている。やはりこの例も胴部紋様帯をもたないが、頸部括れ部直上に帯縄紋が一本巡っている点留意すべきであろう。

埼玉県高井東遺跡(市川他 1974)の7号住居址出土の資料を見ると、口縁部に三段の帯縄紋をもつ波状口縁深鉢形土器が比較的よくまとまっているが、胴部が曾谷貝塚例(図4—1・5)のようになるか否かはわからない。Ⅱa弧線紋系の平口縁深鉢形土器では、図5—1・3・11が口縁部紋様帯にⅡa紋様帯が密接する例で、弧線紋の連結がやや下方に下っているのがわかる。同2はⅡa紋様帯が分離している例である。同10はⅡa帯縄紋系の深鉢形土器である。出土土器中にはその他に口縁部に三段の帯縄紋を有する深鉢形土器があるようだが小片なため不明な点が多い。それについては高井東12号住居址出土の土器(図5—12~14)が参考となろう。Ⅱaの弧線紋が口縁部紋様帯に接続している平口縁深鉢形土器で、弧線紋や器形上の共通性から、この段階に伴うと考えている。

栃木県乙女不動原北浦遺跡(三沢他 1982)のJ1号住居址出土の安行1式は当該段階の様相を非

常に良く示しているだろう。図6—3～13はⅡa弧線紋系の平口縁深鉢形土器で、直線的に外反する口縁部をもつ最古段階の土器とは、外反度、頸部からの立ち上り方、そして口縁部に付される小突起等の違いが良くわかるであろう。同3～5・7～10はⅡa紋様帯が口縁部紋様帯に密接する例である。同3～5から判断するならば、弧線紋の連結がやや下方で行なわれているのがわかる。同6・11～16はⅡa紋様帯が口縁部紋様帯から分離している例である。同1は波状口縁深鉢形土器で、三段の帯縄紋を口縁部にもつが、凹線手法による点に特色がある。頸部以下無紋になるのではなかろうか。同2は異系統の波状口縁深鉢形土器で、全形がわかる重要な資料である。

以上は平口縁深鉢形土器の様相から最古式に次ぐ段階と考えたのであるが、波状口縁深鉢形土器を見ると三段の帯縄紋を口縁部にもつ点で共通するようである。先に取り上げた岩井貝塚例（図2—6）はこの段階である。さて、この段階の良好な資料を提供するJ1号住居址の他にも乙女不動原北浦遺跡には安行1式期の住居址がある。J3号住居址がそれである。

J3号住居址の安行1式を見ると、J1号住居址の平口縁深鉢形土器に比して一層外反しなくなっている口縁部をもつⅡa弧線紋系平口縁深鉢形土器が特徴となっている（図7—5～13）。ここでもⅡa紋様帯が口縁部紋様帯から分離している仲間とそうではない例がある。伴う波状口縁深鉢形土器を見ると、図7—1は四段の帯縄紋を口縁部にもつ例である。同4もそうかもしれない。同2～3は異系統土器の波頂部片であるが、J1号住例（図6—2）とは形象が異なっているかどうかこれだけでは何とも言えない。平口縁深鉢形土器の様相を中心に考えると、このJ3号住居址中の資料はJ1号住居址の土器よりは新しい様相と見做せるであろう。

千代田遺跡のⅣ区縄紋5号住居址出土土器に於いては、四段の帯縄紋を口縁部に配する波状口縁深鉢形土器が多くまとまっている。図8—1は胴部に連弧紋を有している。同22は筆者の言う西広型土器ではないかと思っている。中には三段の帯縄紋を口縁部にもつ平口縁深鉢形土器も存するが、全形を窺える資料はないようである。二段の帯縄紋を口縁部に有する平口縁深鉢形土器（同2～4・6～7・9～10）の器形上の特徴はむしろJ1号住例に近いようにも思える。同2はⅡb紋様帯を有している。あるいは、J1号住資料とJ3号住資料の中間に位置づけるべき段階の資料かもしれないが、一括性に不安がある。この住居址の土器では図8—1の波状口縁深鉢形土器が重要であろう。積橋貝塚例（図版Ⅰ—3）に並行する尖った形態の波頂部をもつ土器と考えられる。

乙女不動原北浦J3号住の平口縁深鉢形土器（図7—5～8・11）と岩井貝塚段階の資料を比較した場合、器形上の差異があまりなくなって来ているが、胴部の連弧紋の性状に違いがあるようである。J3号住例では連弧紋はまだ入組状であるが、岩井貝塚段階の平口縁深鉢形土器（図版Ⅰ—4、図3—2、図版Ⅱ—5）では入組連弧紋がやや弛緩した形状になっている点が特色となろう。曾谷式の伝統を引くⅡ紋様帯の入組連弧紋はその入組みの度合いが弛緩した形状に変化して行く傾向にあるようである。変化の傾向はこれだけではないが、J3号住の平口縁深鉢形土器は岩井貝塚段階に相当近付いた段階と見做せるであろう。つまり、平口縁深鉢形土器は三～四段階の連続的・漸移的変遷をしながら岩井貝塚段階へと移行するのである。一方、波状口縁深鉢形土器の場合、傾

向としては口縁部に配される帯縄紋の数が増えて行くようである（後で触れるように、口縁部四段の帯縄紋に統一されるということはなさそうである）。

今少し具体的に検討して見よう。量的に安定しているⅡa弧線紋系の平口縁深鉢形土器の場合、まず明らかになったのは口縁部紋様帯に二段の帯縄紋を配するⅠ—Ⅱa—Ⅱ類型での変遷であろう。特徴的なのは、Ⅱa紋様帯がⅠ紋様帯から分離しない場合、Ⅱaの連弧紋の連結部がより下方に下ってしまう変化であり、それとは別にⅡa紋様帯がⅠ紋様帯から分離してしまう場合、幅狭の下向きの磨消弧線紋として配されて、その在り方が連綿と引き継がれていくことである。

このⅡa紋様帯の変化二態は同趣のⅠ紋様帯をもつ平口縁深鉢形土器のⅠ—Ⅱa—Ⅱb—Ⅱ類型でも言えることであると思う。図9—6～7はⅡa紋様帯がⅠ紋様帯から分離しない例である。現在の資料検索では西広貝塚例（図版Ⅱ—3）が一番新しい様相を呈しているが、胴部の連弧紋は入組の様相を保っており、器形上の特徴から乙女不動原北浦J3号住例に並行する段階かとも考えている。図9—3・5・8～9はⅡa紋様帯がⅠ紋様帯から分離している例である。図9—6～7と共に探索し得たこれらの資料は乙女不動原北浦J3号住の資料ではなく古相の同遺跡J1号住の資料に並行する段階の土器かと思われる。Ⅰ—Ⅱa—Ⅱb—Ⅱ類型で間違いなく岩井段階に編入出来る資料は現状では判然としないが、いずれ確実な例が得られるであろう。Ⅰ紋様帯に二段の帯縄紋を配する平口縁深鉢形土器にはⅡa帯縄紋系列も存するが、これについても岩井貝塚段階の例は現在の資料からは何とも言えないが存在する筈である。

口縁部が外反する器形の平口縁深鉢形土器には三段の帯縄紋を口縁部に配する土器やより多段の例がある。中妻貝塚（鈴木他 1979, 1981）には三段の帯縄紋を口縁部にもちⅡa弧線紋系と呼ぶべき土器がある（図9—10）。Ⅱa弧線紋はⅠ紋様帯から分離している。Ⅱa紋様帯がⅠ紋様帯から分離していない高井東12号住例（図5—12～14）に比して、より直立に近く立上る口縁部をもつ中妻貝塚例は胴部の連弧紋の入組手法を重視するならば、岩井貝塚段階の基準資料よりは古相となる。乙女不動原J3号住の資料の段階に相当すると思われる。Ⅰ紋様帯に三段の帯縄紋をもち、Ⅱa紋様帯に帯縄紋をもつ例については、岩井貝塚段階例（図版Ⅰ—4）以前と思われる小片は散見するが、良好な例は見い出していない。埼玉県馬場遺跡第二次調査（青木他 1971）で検出された土器（図9—12）は、口縁部に三段の帯縄紋をもち、口唇部には小突起を付している。頸部括れ部直上には帯縄紋を一段有して、胴部の連弧紋は入組手法を取っていないが、口縁部は直立に近く立上り、岩井貝塚例と同じ形制であろう。胴部紋様を比較するとむしろ馬場二次例の方が千代田Ⅳ区6号住安行2式初頭例（八幡他 1972, p168 第42図—37）の胴部紋様に接続的なので、岩井貝塚例より新相を示すと考えるべきである。この馬場遺跡の土器はⅠ—Ⅱb—Ⅱ類型となる。図9—11の馬場のもう一例のⅡa弧線紋系Ⅰ—Ⅱa—Ⅱ類型の土器は器形が大きく異なり胴部括れ部を有せず、内湾する口縁部をもつ深鉢形土器である。岩井貝塚段階の基準資料より新相を呈する土器である。

以上のように検討して来た時、Ⅱa帯縄紋系平口縁深鉢形土器は量的に少ないことは確かである

と思われるが、一方口縁部紋様帯からⅡa弧線紋が分離している平口縁深鉢形土器は安定していることがわかった。Ⅱa弧線紋の配される位置に注目すると、Ⅱa帯縄紋が配される位置と何ら変りがないように見えるが、そのことはⅡa帯縄紋が口縁部紋様帯から分離した位置に配されることがⅡa弧線紋系土器にも影響を及ぼした結果と考えるべきである。この点にⅡa帯縄紋系平口縁深鉢形土器の重要性を認めるのである。従って、極めて規範性の強い土器とも評価出来るであろう。

このような整理を踏えて、波状口縁深鉢形土器の変遷を考えて行くことにする。基本的な傾向としては、時期が新しくなるにつれ口縁部の帯縄紋の段数が増えて行くようである。

最古の段階の資料は少いが、千葉県貝の花貝塚（八幡他 1973）から出土した土器（図10—2）が重要であろう。この土器の口縁部は帯縄紋ではなく刻紋帯二段で構成されている。例えば西広貝塚の曾谷式後半（図10—1）の口縁部二段の刻紋帯の系譜を引くもので、量的には決して多くないがこの手法も連綿と受け継がれるのである。貝の花貝塚例の頸部や胴部は条線紋が全面に加えられ、波頂部・波底部と頸部括れ部の間には蛇行沈線紋を配している。そして、頸部括れ部直上には帯縄紋が一本巡って頸部紋様帯を構成しているのを注意しておきたい。口縁部紋様帯と施紋手法が異なることを考えると、この土器にとって頸部紋様帯が異系統の要素であることを証明しているのではないだろうか。最古の段階は貝の花貝塚例と異なって口縁部紋様帯だけの例が基本となると思われ、馬場小室山遺跡（青木他 1985）で検出された土器（図10—3）が該当するかと思うが、次の段階に入るかもしれない。

その次の段階とは曾谷貝塚D4号住覆土例（図4—1・5・13）や高井東7号住例（図5—4～5・7～9）及び茨城県大塚遺跡（長岡 1981）で得られた土器（図10—4）及び乙女不動原北浦J1号例（図6—1）のような三段の帯縄紋を口縁部にもつことで共通している土器群を当てて考えている。高井東7号住例では胴部の様相はわからないが、胴部の在り方は曾谷貝塚例（図4—1・13）のように胴部・頸部すべてに条線紋が施されるもの、そのような土器の頸部括れ部直上に帯縄紋を一本配するもう一つの曾谷貝塚例（同5）のようなものがある他に、大塚例（図10—4）のように胴部が紋様帯をもつ例も出てくると考えている。大塚例では頸部括れ部直上に紋様帯をもたないが、この頸部には曾谷貝塚例（図4—1）と同趣の条線紋が施されている。本来は頸部・胴部にと施紋されるものであって、胴部に連弧紋が配されることになったため、頸部にだけ施紋されたのであると考えている。後にも決して省略されることなく施紋されて行く点に強い規範性を感じる次第である。尚、図6—1例はまた別の流れの土器である。

さらに次の段階としては、著名な犢橋貝塚例（図版I—3）や千代田Ⅳ区縄紋5号住例（図8—1）のような口縁部紋様帯に四段の帯縄紋をもつ例を考えている。両例とも胴部紋様帯をもっている。頸部には条線紋を施しているが、横に带状に方向を変えているのが千代田例で、縦に带状に方向を変えているのが犢橋貝塚例である。千代田例のような頸部の条線紋も安行1式最古からあることを指摘しておく。この段階の口縁部紋様帯だけの土器としては、寿能泥炭層遺跡出土の土器が好例としてあげられるであろう（図10—5）。この三例と前段階とした土器（図4—1、図10—4）

とを比較すると全体的なプロポーションはよく似ていることがわかる。くり返すが、基本的変化として口縁部の帯縄紋の段数が増えることがあげられるであろう。また、この段階あたりから尖頭状の波頂部と有孔の角頭状の波頂部というヴァリエティになり、円柱状の頂部の存在は不明になる。ところで、貝の花貝塚例（図10—2）、曾谷貝塚例（図4—5）と続いてきた頸部紋様帯をもつという形象の土器の、この段階の土器は残念ながら良好な該当例を検索出来なかった。

千葉県余山貝塚（安孫子他 1986）の波状口縁深鉢形土器（図10—7）、岩井貝塚の土器（図2—1）、千代田遺跡の土器（図10—6）は四段の帯縄紋を口縁部にもち、胴部に連弧紋をもち、頸部が狭くなっている点で共通している。犢橋・千代田・寿能例（図版I—3、図8—1、図10—5）と比較すると頸部の幅の違いだけでなく全体的なプロポーションも異なって来ているのであって、それらを時期差の証左と考えたい。余山貝塚・岩井貝塚・千代田例を岩井貝塚段階の直前と考えるのである。岩井貝塚例が頸部に一本の帯縄紋による紋様帯をもつのは既に触れたが、千代田例（図10—6）の頸部括れ部をよく見ると、三段の刺突列と羽状の条線紋との間に無紋帯が貫入しているのがわかる。縄紋が施紋されていないだけで、この部分が紋様帯を形成していると思われる。それは岩井貝塚段階の土器である茨城県外塚遺跡（外塚遺跡調査会 1986）の二例（図12—1・5）の一方が帯縄紋による頸部紋様帯をもち、他方が無紋帯によって頸部紋様帯が形成されることから窺えるであろう。

岩井貝塚・千代田例のように頸部括れ部に一段の紋様帯をもつ土器に新たに平口縁深鉢形土器のⅡa紋様帯が転写されて西広貝塚 No. 204 大形ピット例（図3—1）が登場してくるのであるが、ここで問題としなければならないのは、頸部括れ部直上に見られる紋様帯の系統であろう。この紋様帯が安行1式の最古の波状口縁深鉢形土器に付加されるのは見て来た通りである。今までこの点の重要性が指摘されていないため、報告書等で口縁部ばかりが取り上げられ、頸部付近の様相には注意があまりはらわれていないのが実状であって資料検索に困難をきたしたが、各段階に量的にはともかく、明確に継承されていくものと思われる。この紋様帯が施紋される器形上の位置及び帯縄紋を基本とすることから、筆者は平口縁深鉢形土器の紋様帯で仮りにⅡb紋様帯と呼んだ紋様帯が転写された結果と見るべきであろうと考えている。と同時に、波状口縁深鉢形土器はⅠ紋様帯のみをもつのが古相かつ基本的と考えられ、胴部に連弧紋をもつことも平口縁深鉢形土器の胴部紋様帯からの転写と考えている。この場合、波状口縁深鉢形土器の頸部に条線紋が残っているのがその間の状況を示唆しているであろう。

そのように見てくるならば、波状口縁深鉢形土器の岩井貝塚段階へ至る過程というのは、Ⅰ紋様帯のみの波状口縁深鉢形土器がⅡb紋様帯、Ⅱ紋様帯を平口縁深鉢形土器から転写されて、それらをもつ類型が登場してくる過程であると言えよう。岩井貝塚段階直前には、Ⅰ—Ⅱ類型（図10—7）、Ⅰ—Ⅱb—Ⅱ類型（図2—1、図10—6）が登場しているのであるが、Ⅱa紋様帯をもつ類型がないのは留意しなければならない。

岩井貝塚の段階の意味を再説するならば平口縁深鉢形土器のⅡa紋様帯を新たに重畳させたⅠ—

Ⅱa—Ⅱb—Ⅱ類型の波状口縁深鉢形土器が登場してくることであると言えよう。換言するならば、平口縁深鉢形土器の有する頸部・胴部紋様帯それぞれを一個体に合わせもった類型が波状口縁深鉢形土器に生成されるのである。従って、波状口縁深鉢形土器の変遷史から見れば、岩井貝塚段階に画期があるのは間違いないことなのである。しかし、それに至る間に、波状口縁深鉢形土器は、平口縁深鉢形土器との親和的關係から平口縁深鉢形土器の紋様帯が転写され変容が始まっており、平口縁深鉢形土器が連続的に変化しかつ量的に安定した存在であることは重要である。平口縁深鉢形土器でもⅡa紋様帯の在り方に関しⅡa帯繩紋系の影響を受けたⅡa弧線紋系の生成があったのも認識しなければならない。平口縁深鉢形土器のⅡa紋様帯が波状口縁深鉢形土器に転写されて行くのはかかる土器環境を踏えてのことなのである。平口縁深鉢形土器から見れば、平口縁深鉢形土器の紋様帯構成とより同質の波状口縁深鉢形土器が生成されていく過程が岩井貝塚段階へ至る道程であり、岩井貝塚段階はその帰着点であろうと考えられる。この間に複雑な社会的・歴史的状況を垣間見る思いがする。

4. 岩井貝塚段階以後の変遷

岩井貝塚段階以後の安行1式の変遷を考える手続きとして、波状口縁深鉢形土器の口縁部紋様帯と頸部紋様帯とが合体する例の様相把握、そして、合体した部分の分離による三角区画の独立(=安行2式の登場)の解明がある。

その前に先に仮定した図2—2→同3という変遷の是非を検討しておかなければならない。岩井貝塚段階の範囲を考える時、平口縁深鉢形土器との親和的關係により頸部紋様帯が重畳する波状口縁深鉢形土器(図2—2, 図3—1, 図11, 図版Ⅱ—6)と頸部紋様帯に小突起が付加された土器(図2—3, 図12)とを含めて考えているのであるが、小突起のないものから付加される土器へと変化すると単純に考えられるのであろうか疑問な点がある。というのは、明らかに型式学的に後出の土器(図13—1・3), つまり口縁部紋様帯と頸部紋様帯とが合体した土器に、頸部紋様帯に小突起を付している例と付されていない土器とがあるからである。小突起を有する石神貝塚例(図13—3)と付加されない寿能例(同1)は全形が窺えるので比較して見ると、ほぼ直線状の胴部紋様が酷似しているのに気がつく。寿能例は口縁部に三段の帯繩紋を配するが、これは岩井貝塚例や寿能の別の土器(図2—3, 図12—6)から考えて、一つの系統として脈々と存することがわかる。従って、口縁部紋様帯と頸部紋様帯とが合体している石神貝塚や寿能の土器を同時期と考えなければならないのである。そうした場合、頸部紋様帯に小突起のない段階から小突起が配される段階へとは単純には考えられないことになるのである。

しかし、それだけで図2—2, 図3—1, 図11, 図版Ⅱ—6の土器群と図2—3, 図12の土器群とを並行關係に於いて理解し得るかとなるともう少し検討しておかなければならないことがある。小突起を頸部紋様帯にもつ土器群(図2—3, 図12)を見ると、寿能の二個体の中では型式学的に新相を呈しているように思われる。図12—7は正面図右側で口縁部紋様帯の波底部の部分と頸

部紋様帯の上段が合体してしまっている。その点で、この寿能例は石神貝塚例（図13—3）の直前と言ってよいであろう。もう一つの寿能例（図12—6）は胴部紋様の変化が石神貝塚例に近い。上向きの弧線紋を連結して下端は直線になってしまっている胴部紋様をもち、全体に帯状に近く、その意味で石神貝塚例直前と言えるであろう。さらにこの土器の頸部紋様帯の上段の帯縄紋は口縁部紋様帯の波頂部波底部のうねりに合わせた動きを示しているようである。この動きは他の土器に見られず、この点も新しい様相と把握すべきであろう。この寿能二例を基準とした場合、これに対応すべき土器を、頸部紋様帯に小突起を付さない土器群からは現在の資料では採せない。しかし、両グループの土器を通観した場合、口縁部紋様帯と頸部紋様帯との間が比較的広いものと狭く合体直前のようなものそれぞれが両グループに存在することがわかる。幅広い頸部というものは重畳した頸部紋様帯が生成されるために再度間隔をあけるようになったためと思われ、その後口縁部紋様帯と頸部紋様帯とが合体するように変化していくのであろうと考えている。従って、小突起を付さない頸部紋様帯をもつ波状口縁深鉢形土器のグループに寿能の二例に類似した土器が見あたらないのは、良好な資料に恵まれないだけであって、本来はそれぞれの変化に対応する土器が存在するのであろうと考えている。つまり、両グループを並行関係におくことはさほど矛盾することではないと思う。

では、頸部紋様帯に小突起が付くという現象は如何に考えるべきであろうか。筆者はこの現象を他器種との関係の中でその由来を探るべきと考えている。

その器種とは、加曾利B式以来の変遷をもつ台付鉢形土器（及びそれと同趣の体部を有する鉢形土器）のことである。この土器は安行1式期内でも数段階の変遷をもっているようである。まず変遷の概略について述べておく。はじめは口唇部端と体部の強く屈曲する部分とに刻紋列をもつだけであるが、口縁部に配される縦方向の条線紋の下端にも刻紋列が巡らされるようになる。中にはこの条線紋下端の刻紋列と体部屈曲部の刻紋列との間に刻紋列をもつものも出てくる。そして、その後体部の刻紋列は明確な刻紋帯となり三段の刻紋帯が主流になり、それらに小突起が付き始めるのである。図14—1～3がそれである。刻紋帯のうち一本に付く場合からすべての刻紋帯に付くまで色々であるが、これらが時期差と直に関連するかは不明な点がある。

千葉県吉見台遺跡（近森他 1983）には図14—1～3より型式学的に新しい土器がある（図14—5）。いくつかの点で変化がある。一番大きな変化は、縦方向の条線紋ではなく羽状の条線紋が口縁部に配されることである。体部の三段の刻紋帯に目を移すと、例えば図14—3では上下一連に一個の小突起を配していくのであるが、吉見台例では最下段の刻紋帯のところに付く小突起は二個一対になっている。これも新しい様相である。むしろこの様相によって、羽状の条線紋が配されることが時期差の中で存したことを示唆していると言えるであろう。もう一つの特徴として吉見台例では、羽状条線紋中に縦二本の沈線紋を配していることがあげられる。この縦沈線紋の上下端にも小突起が付いている。茨城県小山台貝塚（市川他 1976）にも吉見台例とよく似ている土器がある（図14—9）。しかし、本来体部の刻紋帯に上下連なるように配すべき部分の小突起は截痕を伴っている。また、石神貝塚例（図14—11）は体部の刻紋帯三段に配されている小突起はすべて截痕を

伴っている。

これらの例に見られる小差はあたかも吉見台例（図14—5）→小山台貝塚例（同9）→石神貝塚例（同11）と考えられるかのようである。この石神貝塚例ではもう少し指摘しておかなければならない特徴がある。それまでの該器種の器形上の特徴を考えた場合、口唇部が肥厚するのが特徴と言えるのであるが、石神貝塚例では口唇部が外側に突出するように変化しているのである（その突出部分に刻紋が巡っている）。これが石神貝塚例の器形上の特徴と考えられるであろう。

図14—1～3よりも新しい台付鉢形土器に、もう一つの系列があるようである。それは口縁部直下に無紋帯が貫入し条線紋の上端を刻紋帯で区画する土器である（図14—4・6・8・10）。実は典型的安行2式、そして安行3a式と極めて変遷がよく迎れる系列である。埼玉県小深作遺跡（大宮市教委 1971）出土の台付鉢形土器（図14—4）は、吉見台例と同じ羽状条線紋をもち、体部刻紋帯に小突起を配する仕方も吉見台例と同じである。しかし、構成の仕方は違う別系列の土器である。馬場二次調査例（図14—6）は刻紋帯で区画される中にこの例では斜条線紋が配され、吉見台例（図14—5）と同趣の截痕のない小突起がそれぞれの刻紋帯に付加されている。千代田例（図14—8）は截痕を伴う小突起が付され、次の段階のようである。馬場小室山遺跡（小倉他 1982）では、器形上の特徴——突出する口唇部——が石神貝塚例と共通する台付鉢形土器が検出されている（図14—10）。刻紋帯に配される小突起はすべて截痕を伴っている。千葉県公津原 Loc. 39遺跡（天野 1981）では截痕を伴わない小突起をもち、口縁部には羽状条線紋ではなく斜条線紋を配する台付鉢形土器がある（図14—7）。この例があることも含めて、図14—4・6と同5・7が並行すると考えている。本来は両系列とも羽状・斜状条線紋をもっているものと推察している次第である。また、図14—10～11を安行2式初頭と考えているが、その点については後述する。

どうも岩井貝塚段階及びそれ以後、今見て来たような変遷をもつ台付鉢形土器と親和的關係が徐々に強まって行くようである。

先程問題にした岩井貝塚段階の波状口縁深鉢形土器で頸部紋様帯に小突起を有する土器が出現する現象は、波状口縁深鉢形土器とこの台付鉢形土器との交渉によるものと思われる。つまり両器種がもつ要素を相互にやり取りした結果であると考えるのである。図14—4～5に見られる羽状の条線紋と同6～7に配される斜条線紋は図12の岩井貝塚段階の波状口縁深鉢形土器の頸部に見られる羽状条線紋や斜条線紋の転写であり、他方図12に見られる頸部紋様帯上の小突起は図14—4～7の体部刻紋帯の小突起が転写された結果なのである。とくに図14—4～5に見られる縦二本の直線状沈線紋は波状口縁深鉢形土器の頸部に固有の二本一対の直線状沈線紋の系統であろう。台付鉢形土器に羽状沈線紋とその直線状沈線紋が合わさっているのは正に波状口縁深鉢形土器の頸部紋様が転写されるという親和的關係を如実に物語っていよう。その背景には、それぞれ発生系統を異にしている部位が結果的に偶然に似たような構成をとり、相互に類似したものと意識される事態が生じ、そのことによって相互に要素を交換することを可能にしたのであろうと思う。しかし、頸部紋様帯に小突起を付加しない土器（図2—2，図3—1，図11，図版Ⅱ—6）も安定して存在しているこ

とを想起するならば、その関係が波状口縁深鉢形土器の全体には及ばなかったことも正確に認識しておかなければならない。この場合は、平口縁深鉢形土器が波状口縁深鉢形土器の頸部へ紋様帯を転写させると言う親和的關係とは社会的背景を同じには考えるべきではないと思うのである。ともあれ、そういう評価とは別に岩井貝塚段階の精製土器の器種構成を考える場合、台付鉢形（鉢形）土器の占める位置の重要性を認識しておかなければならないであろう。

そのような型式学的推察を前提とするならば、千葉県祇園原貝塚（鷹野 1978）から出土した頸部に小突起をもつ波状口縁深鉢形土器（図10—8）は岩井貝塚段階の数少ないⅠ—Ⅱ類型の資料ということになるであろう。

ところで、岩井貝塚段階の次の段階は極めて資料的には制約があるが、寿能例や石神貝塚例（図13—1・3）を基準に考えたい。まず胴部紋様を見ると、再説することになるが、連弧紋とは全く違って直線的つまり帯状の紋様になっている点が大きな変化である。もう一つの特色は、口縁部紋様帯最下段の帯縄紋と頸部紋様帯の上段の帯縄紋が合体してしまうことである。これは波状口縁深鉢形土器独自の変化であろう。結果的に三角形区画が出来ていることに注目したい。石神貝塚例（図13—3）ではこの三角形区画内に羽状沈線紋が入っており、寿能例（図12—7）とを合わせて見るに、口縁部紋様帯と頸部紋様帯との合体という関係がきわめてスムーズに理解出来よう。石神貝塚例の場合頸部紋様帯に付される小突起に截痕を伴っており、台付鉢形土器の変遷と対応していると思う。一方、寿能例（図13—1）は小突起を頸部紋様帯には有さない流れの土器である。換言するならば、台付鉢形土器と親和的關係にない土器である。

この二例の口頸部と胴部の様相を以て独立した段階かつ安行1式の終末と把握しておきたい。伴う精製土器の別器種を考えた場合、寿能遺跡内での出土状況を考えると図13—5が伴う深鉢形土器であろう。この段階の器種構成についてはよくわからない点が多いが、先に触れた二例（図9—11～12）についても組成化していると思っている。

問題はどのようにして三角形区画が頸部紋様帯から分離するかである。筆者は図13—2・4・6の土器を今安行1式終末とした土器の直後の安行2式と考えている。これらの土器を基に三角形区画の分離独立のプロセスを考えてみることにしよう。

図13—2・4・6の土器は、口縁部・頸部各紋様帯が同一の手法（帯縄紋／刻紋帯）で表現されているのは、安行1式と同じ特徴である。そして、口縁部紋様帯中に小さく三角形区画が分離収納されているのである。胴部紋様が判明している埼玉県小深作遺跡（大宮市 1971）の波状口縁深鉢形土器で見ると、上向きの磨消弧線紋を胴部に配しており、この胴部紋様は安行1式終末の寿能・石神貝塚例とは全く異なっているのである。また、所謂ブタ鼻状小突起は付されていない。つまり、これらの土器は安行1式終末と典型的安行2式との中間的な様相を呈していると言えるであろう。

ここで着目しなければならないのは、小深作例（13—6）と東京都吉祥山遺跡（橋口他 1984）の波状口縁深鉢形土器（図13—4）に見られる羽状条線紋が施紋される部位である。寿能例（図12—7）→石神貝塚例（図13—3）と見てくると、合体した部分が分離するとするならば、本来三角区

画の中に条線紋が施紋され、頸部には帯縄紋（刻紋帯）が一本残っていないと型式学的に予想されるのに、実は吉祥山例では三角形区画と頸部紋様帯の一段の帯縄紋との間に羽状条線紋が加えられるという謂ば先祖返りの形態を示し、他方、小深作例では三角形区画の直下は無紋帯となりその下の二段の刻紋帯中に羽状条線紋が配され、頸部括れ部直上にもう一本刻紋帯が巡るという全く新しい構成を示すということになっているのである。寿能例（図13—2）は拓図でははっきりしないが、三角形区画の直下に条線紋の末端が残っている（羽状か斜状かはわからない）ので、吉祥山例と同じ位置に条線紋が配されていると考えられ、吉祥山例的な頸部の様相をもつものと言えよう。

要するに、寿能・石神貝塚例（図13—1・3）からの直後の変化として、一つに吉祥山例的な様相と、もう一つ小深作例的な様相があると考えられそうである。と同時に、この変化二態は寿能・石神貝塚例を代表とする段階からの漸移的な変化とは思えないのである。そこでこの場合、若井貝塚段階から形成され始めた台付鉢形土器との親和的關係を想起すべきであろう。結論を先に言うならば、前に見た台付鉢形土器の二系列の変遷に対応して吉祥山例と小深作例が出て来たと考えるのである。

具体的に見ると、小深作例のような頸部紋様帯の構成は、馬場小室山（図14—10）のような口縁部直下は無紋帯になりその下の体部紋様帯中に条線紋を配するという構成の転写を受けて登場したと見るべきであろう。そのために新たな頸部紋様帯の把持ということになったのである。もう一つの変化である吉祥山例の羽状線紋の配置の仕方は、馬場小室山例に並行する別系列の石神貝塚例（図14—11）が口縁部直下体部紋様帯との間に羽状条線紋を施紋するというその構成の転写を受けてのことであると考えている。結果的に先祖返り的な頸部形態が生成することになるのである。ここで重要なのは、波状口縁深鉢形土器と台付鉢形土器との新たな親和的關係の登場ということであろう。波状口縁深鉢形土器で頸部紋様帯に小突起を付さない系列でも、三角形区画の分離・頸部紋様帯の再編成に於いて台付鉢形土器との親和的關係によって、例えば吉祥山例のような波状口縁深鉢形土器が創出されるのである。

そのような意味で、筆者は吉祥山・小深作・寿能例（図13—2・4・6）と馬場小室山・石神貝塚例（図14—10～11）を安行1式直後即ち安行2式の初頭に位置付ける意義を考えているのである。寿能や石神貝塚の波状口縁深鉢形土器（図13—1・3）を安行1式終末段階と考えることの理由も判明したであろう。

全形が窺える小深作例についてももう少し述べておこう。小深作例の胴部紋様は上向きの磨消弧線紋をそれぞれ直接連結させないで横に連続させていくもので、その後の安行2式の該器種の胴部紋様で最も多用される紋様であるが、安行1式終末段階の波状口縁深鉢形土器の胴部紋様からは明らかに不連続である。小深作例の胴部紋様は以前にも述べたことであるが、長い変遷史から登場する西広型土器である千代田Ⅳ区6号住居址出土土器（図13—7）からの胴部紋様の転写によると考えている。小深作例自体は同期する複雑な親和的關係の中で存在する土器と言えよう。ただし、安行

2式波状口縁深鉢形土器の胴部紋様は西広型土器との親和的關係では説明出来ない系統をもっているが、本稿の目的ではないので割愛する。一方、西広型土器は千代田例のように安行2式期には頸部に磨消縄紋をもつ土器として、該期以後の磨消縄紋の展開に大きくかかわる土器として重要な位相を占めて行くようだが、これも詳細は安行2式土器及びそれ以後の各土器型式構造論で触れることにする。もちろん、磨消縄紋の展開とは姥山Ⅱ式をも射程に入れてのことである。例えば、姥山Ⅱ式の胴部紋様の帯縄紋もこの西広型土器の胴部紋様から派生してくるのである。

最後にⅠ—Ⅱ類型の波状口縁深鉢形土器の問題について触れておく。岩井貝塚段階には祇園原貝塚例(図10—8)のように台付鉢形土器との親和的關係を有するⅠ—Ⅱ類型があるが、理論的には台付鉢形土器との交渉のないⅠ—Ⅱ類型も存在する筈である。また、Ⅰ—Ⅱ類型でかつ安行1式終末段階の土器というものの存否も問わなければなるまい。Ⅰ—Ⅱ類型の土器に於いても台付鉢形土器との親和的關係の有無、あるいはその交渉の内実に応じて多様な在り方の中で安行2式期へ移行する可能性があろう。現在の断片的資料では具体的にトレースするには不足であるが、波状口縁深鉢形土器の変遷を考える場合無視してはならぬ問題である。そして、そのことは、先に安行1式の終末の段階とした三角形区画を形成する波状口縁深鉢形土器に於いても台付鉢形土器と親和的關係のないまま安行2式期へ推移する系列の存否を吟味しなければならないということにもなる。この点についても断片的だが該当する資料があるようである。詳述は後日を期すことにする。

尚、これら付加的に述べた論点は、晩期前半の複雑な土器群生成の遠因を語る観点となるので、その意味でも追求の手をゆるめる訳にはいかないのである。

結 語

以上の分析を要約するならば、安行1式の細別は、規範的な土器の一つである波状口縁深鉢形土器の形象変化を“岩井貝塚段階”を基準として、それ以前とそれ以後に分けて考えるべきであろうということになる。そして、それぞれを(古)、(中)、(新)式と呼ぶのである。安行1(古)式は既述の如く数段階の変遷を有し、安行1(中)式も小差を有しているのは述べてきた通りである。安行1(新)式は器種構成を示す良好な資料に恵まれていないが、波状口縁深鉢形土器に於いて口縁部紋様帯と頸部紋様帯とが合体するという独自の变化を有し、安行2式への転生の基本となる段階であるという土器型式上の重要性を斟酌して、(新)式として分離した次第である。

更に続けると、このような安行1式三細別が表わしている安行1式の構造的変遷というのは、平口縁深鉢形土器が伝統的に保持する頸部紋様帯(Ⅱa・Ⅱb)と胴部紋様帯(Ⅱ)が波状口縁深鉢形土器に転写される過程であり、換言するならば、波状口縁深鉢形土器が紋様帯上平口縁深鉢形土器に変容してしまう過程とも言えよう。(中)式とした“岩井貝塚段階”は、波状口縁深鉢形土器の平口縁深鉢形土器的変容の到達点と認識すべきである。一方、(中)～(新)式と至る過程では台付鉢形土器との親和的關係も形成され始め、(中)式で波状口縁深鉢形土器の頸部紋様帯に台付鉢形土器の影響を受ける土器が登場し、台付鉢形土器自体も伝統的条線紋を波状口縁深鉢形土器の口

頸部に施紋される条線紋に置換してしまうという変容を示すのである。(新)式では、紋様帯上平口縁深鉢形土器的に変容した波状口縁深鉢形土器が独自の変化を示す一方、台付鉢形土器との親和的關係は過渡的であるが、安行2式とすべき波状口縁深鉢形土器の登場は、それら重層的な親和的關係という環境の中で台付鉢形土器との親和的關係の質的上昇に於いてなされたのであり、と同時に、更に別種土器との親和的關係の中で胴部紋様を得るという事態も現出するのである。

さて、このように基本的には深鉢形土器二態を対象とした細別及び分析から得た関係性によって、安行1式という土器型式が如何なる系列的及び系統的構造を有しているのか、各種土器固有の性格とは何か、各種土器が時期的変遷の中で、空間的在り方も含めて如何に存在しているのか等々その理解の端緒が得られたであろうと思うが、正に第一步にすぎない。今後も多様な土器群を分析の対象に据えて行かなければならないであろう。分析に際して「親和的關係」をキー・ワードにしその関係性に於ける器種のセットを得て該式の構造の一端を示し得たが、体系立った理解のため、より立体的な視点を模索しなければならない。その視点形成のため、土器資料の検索、属性・特徴の抽出に、遺跡内・遺跡間・遺跡群という階層を常に上昇・下降して行かなければならない(註5)。遺構中、遺跡内の土器の組成をそのまま実体視する立場には筆者は位置しないのである。そして、そのような営為によって、安行1式の構造と伴存する異系統土器や並行型式を含めた土器環境とそのsocial contextが解明されて行くであろうと透察している。

ところで、近年、特定の縄紋土器型式の詳細な研究とは別に、縄紋土器型式の意味するところについて、いちいち題名をあげないが、メタフィジカルな解釈が多く提出されている。それらを読むたびに、単純かつ平板な土器型式への理解が各氏の所説の根底に見え隠れする気がしてならない。単純な理解には単純な解釈しか照応しないであろう。又、型式の解釈に援用される他分野の研究(例えば言語論)について稚拙でしかない理解を目の当りにする場合もある。更に、解釈の常套手段である民族(俗)学的援用も御都合主義に赴いて一向に方向修正が利かないようである。第一義的であるべきは縄紋土器型式の解釈学ではなく、特定土器型式の上記したような具体的かつ構造的な理解へ向う姿勢であると確信する。他方、本邦先史考古学が既に提出している縄紋土器型式研究の体系及びプログラムを今一度確認しておく必要がある(大塚 1986)。それをも踏まえて自己の研究スケジュールを組み立てるべきであるという立場に筆者はいるのである(註6)。

戦後40年を既に経た現在、縄紋土器研究の表層的活況を単に浮遊するだけに留ることなく、本邦先史考古学の蓄積を真に活用出来る地平に我々はいるか否か自らに問い掛けてみなければなるまい。

論究すべき対象は広大である。今回はここで擱筆することにする。

末筆ながら、小考を草するにあたって、藤本 強、名久井文明、名久井芳枝、鷹野光行、米田耕之助、田中新史、柳沢清一、大貫静夫、宮内良隆、菅谷通保の方々には色々のご教示いただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる次第である。又、縄紋土器研究会<縄紋土器はいかに研究されいかに研究すべきか>に於いて、草案を幾度か話す機会があり、その際の質疑応答は有意義であった。参加された会員の方に感謝の念が伝わればと願って已まない。

(1986. 6. 20)

註

- (1) 晩期初頭を飾る三叉紋については、1981年6月8日に東京大学文学部考古学研究室談話会に於いて「縄紋時代晩期の諸問題——最近の動向と課題——」と題した発表の中で触れておいたが、当日関係資料を配布しただけで、発表内容は印行するに至っていない。
- (2) 型式組成中の特定器種間のある階層での特定・固定的な影響・交渉関係を仮に「親和的關係」と呼んでいる。又、型式間に於いても特定器種をめぐってその関係が問われねばならない。
- (3) 頸部括れ部には通常一段ないし複段の刺突列が巡っているが、ここではその刺突列の直上という意味で使っている。
- (4) 米田耕之助氏のご好意で西広貝塚の大形ピット群出土の安行1式土器を検討させていただいた。本稿で記す所見についてはその際の観察に負っているが、事実関係に誤りがあればすべて筆者の責任である。
- (5) 大塚(1985)文献の「縄文式土器と型式編年研究」の項を参照せよ。
- (6) 筆者の研究態度に対して、大塚(1983)論文に論駁を試みる安孫子昭二氏によって、「山内説を絶対視する意識の中から」(安孫子他 1986 116頁)と揶揄されたが、相手が違うのではないかと苦笑を禁じ得なかった。安孫子氏はその論評の中で、寿能泥炭層遺跡第10地点の加曾利B式をB2式古相に置く旨を言及しているが、当遺跡の報告者の一人である筆者は、第10地点の加曾利B2式を考える場合、B1式紋様である「の」の字単位紋が変容して行く流れの一つに対弧紋になって行く流れがあるが、その対弧紋をもつ土器の様相、B1式の紋様である雑書き風な沈線紋から羽状沈線紋へと変容して行くその羽状沈線紋の登場、所謂ソロバン玉状の土器の細別での古相の土器の集中等々を踏えて、第10地点はB2式古相の土器が集中していると考えている。安孫子氏がB2式とした第10地点の土器の一部は、報告でも記した通り、加曾利B1式と筆者は考えている。因に、筆者に対して、既に鈴木正博氏より該論文の論評を通じて、「山内博士を典拠とされているかの様に書かれているが、文様帯の理解に乏しいのが残念である」(鈴木1984 90頁)と揶揄されているが、間違った編年観の鈴木氏に対し筆者が提出した対案について具体的な反証がなく、論点がずれているとしか思えなかった。又、どうも鈴木氏は山内清男氏の戦後の加曾利B式研究は無視するようである。さて、これら余り予期しなかった内容を含む評論を味読するにつけ、実に様々な心情と思惑が彼らを駆り立てていることを痛感した。当事者以外の者にとっては全く救いようのない閉塞の情況としか映らないであろう。縄紋土器に対峙する筆者の立場は該論文の言を引用するならば、「縄文式・弥生式土器を掲載する『日本先史土器図譜』のperspectiveは改めて論じなければならないであろう。それを踏えた研究史的照射と今日的縄文式土器研究課題の摸索との交差に、本邦の先史考古学研究の進むべき一つの方向があるのではないかと私考する」(大塚 1983 221頁—222頁)立場である。本稿も『日本先史土器図譜』の今日的蘇生を一つの課題としている。

引用参考文献

- 青木義脩他 1969 『馬場遺跡発掘調査概報』浦和市教育委員会
 青木義脩他 1971 『馬場遺跡第二次調査報告』浦和市教育委員会
 青木義脩他 1985 「馬場小室山遺跡」『馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会
 安孫子昭二他 1986 『余山貝塚資料図譜』国学院大学考古学資料館
 天野努 1981 「Loc.39(八代玉作)」『公津原Ⅱ』千葉県教育委員会
 市川修他 1975 『高井東遺跡調査報告書』埼玉県遺跡調査会
 市川修他 1976 『小山台貝塚』図書刊行会
 市川修他 1980 『下栢間遺跡』埼玉県遺跡調査会
 市川修他 1981 『富士塚前遺跡』埼玉県遺跡調査会

大塚達朗

- 大塚達朗 1981 「小豆沢出土安行3 a式深鉢再考——三叉紋の系譜から」彌生 No.11
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曽利B式土器の研究（I）——最近の成果の検討と新たなる分析——」
東京大学文学部考古学研究室研究紀要2
- 大塚達朗他 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』埼玉県教育委員会
- 大塚達朗 1985 「1982年度の日本考古学界 3 縄文時代の研究の動向」日本考古学年報35
- 大塚達朗 1986 「1985年の歴史学界——回顧と展望—— 日本考古二」史学雑誌95—5
- 大町四郎・片倉修 1937 「下総岩井貝塚——特に安行式土器に就いて——」先史考古学1—1
- 大宮市教育委員会社会教育課 1971 『小深作遺跡』大宮市教育委員会
- 小倉均他 1982 『馬場（小室山）遺跡』浦和市遺跡調査会
- 小田静夫他 1975 「埼玉県石神貝塚の調査」
- 上総国分寺台遺跡調査団 1977 『西広貝塚』早稲田大学出版部
- 菅谷通保 1983 「J—4号住居跡」『祇園原貝塚Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査団
- 杉原荘介・戸沢充則 1965 「茨城県立木遺跡」考古学集刊3—2
- 鈴木正博他 1979 『取手と先史文化 上』取手市教育委員会
- 鈴木正博 1980 a 「大森貝塚「土器社会論」序説」『大田区史（資料編）考古Ⅱ』東京都大田区
- 鈴木正博 1980 b 「「曾谷式」研究序説」『古代探叢』早稲田大学出版部
- 鈴木正博他 1981 『取手と先史文化 下』取手市教育委員会
- 鈴木正博他 1982 「大森貝塚の安行式土器（一）」史誌17（抜刷）
- 鈴木正博 1984 「下総奉免安楽寺貝塚の加曽利B1—2式土器に就いて」下総考古学7（抜刷）
- 鷹野光行 1978 「その他の出土遺物」『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査団
- 近森正他 1983 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』佐倉市遺跡調査会
- 寺門義範 1979 『大多喜町堀之内上の台遺跡』千葉県夷隅郡教育委員会
- 外塚遺跡調査会 1985 『外塚遺跡』下館市教育委員会
- 長岡芳 1981 「茨城県西地方に於ける安行I式土器の分析——下館市大塚遺跡(1)の資料——」常総台地12
- 長岡芳 1982 『真壁町史料 考古資料編Ⅱ』真壁町
- 橋口尚武他 1984 『吉祥山』武蔵村山市教育委員会
- 堀越正行他 1977 『曾谷貝塚D地点』市川市教育委員会
- 三沢正善他 1982 『乙女不動原北浦遺跡』小山市教育委員会
- 宮内良隆 1980 「安行1式土器について」『大田区史（資料編）考古Ⅱ』東京都大田区
- 元井茂他 1983 『赤城遺跡』川里村教育委員会
- 八幡一郎他 1959 『世界考古学大系1』平凡社
- 八幡一郎他 1972 『千代田遺跡』四街道千代田遺跡調査会
- 八幡一郎他 1973 『貝の花貝塚』東京教育大学文学部史学方法論教室
- 山内清男 1934 「真福寺貝塚の再吟味」ドルメン3—12
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学1—1
- 山内清男 1940 『日本先史土器図譜』Ⅶ
- 山内清男 1941 『日本先史土器図譜』Ⅹ
- 山内清男 1964 「文様帯系統論」『日本原始美術Ⅰ』講談社
- 米田耕之助・小川静夫 1981 「西広貝塚第2次調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
- 米田耕之助 1983 「西広貝塚出土の安行I式土器」史館14

挿図・図・図版の出典

挿図1：山内1964文献

図1：山内1934文献

図2：大町・片倉1937文献

図3：米田・小川1981文献

図4：堀越他1977文献

図5：市川他1975文献

図6～図7：三沢他1982文献

図8：八幡他1972文献

図9—1・4：八幡他1972文献，2：市川他1981文献，3：杉原・戸沢1965文献，5：青木他1969文献，6：鈴木他1979文献，7：市川他1980文献，8：安孫子他1986文献，9：元井他1983文献，10：鈴木他1981文献，11～12：青木他1971文献

図10—1：米田・小川1981文献，2：八幡他1973文献，3：青木他1985文献，4：長岡1981文献，5：大塚他1984文献，6：八幡他1972文献，7：安孫子他1986文献，8：鷹野1978文献

図11—1：上総国分寺台1977文献，2：寺門1979文献，3：長岡1981文献，4：長岡1982文献，5：外塚1985文献，6：安孫子他1986文献，7：八幡他1959文献

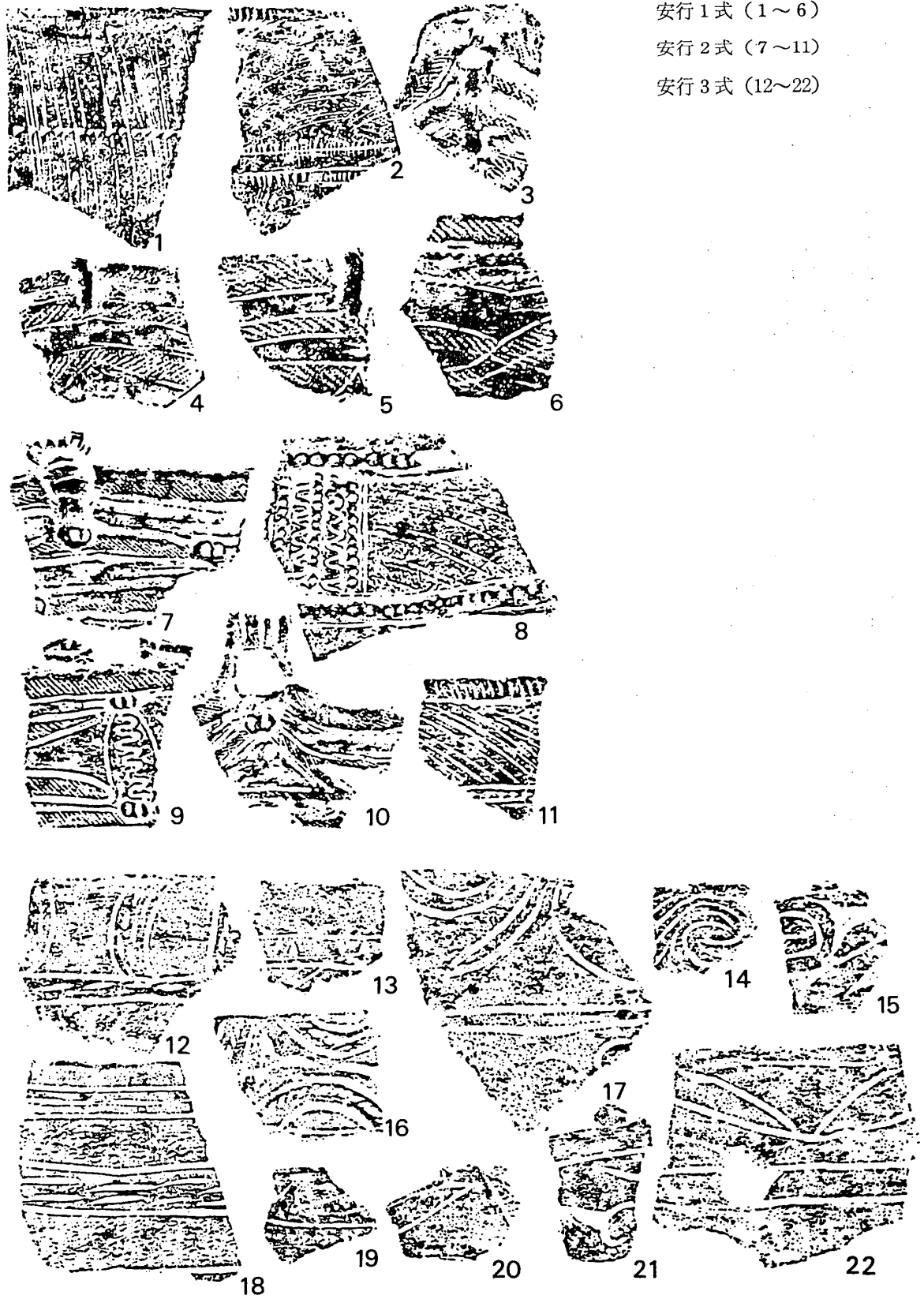
図12—1・5：外塚1985文献，2・4：小田他1975文献，3・6～7：大塚他1984文献

図13—1～2・5：大塚他1986文献，3：小田他1975，4：橋口他1984文献，6：大宮市教委1971文献，7：八幡他1972文献

図14—1・11：小田他1975文献，2：鈴木他1981文献，3・9：市川他1976文献，4：大宮市教委1971文献，5：近森他1983文献，6：青木他1971文献，7：天野1981文献，8：八幡他1972文献，10：小倉他1982文献

図版I：山内1940文献

図版II：米田1983文献



安行1式 (1~6)

安行2式 (7~11)

安行3式 (12~22)

図1 山内清男氏の安行式細別 (1934年)

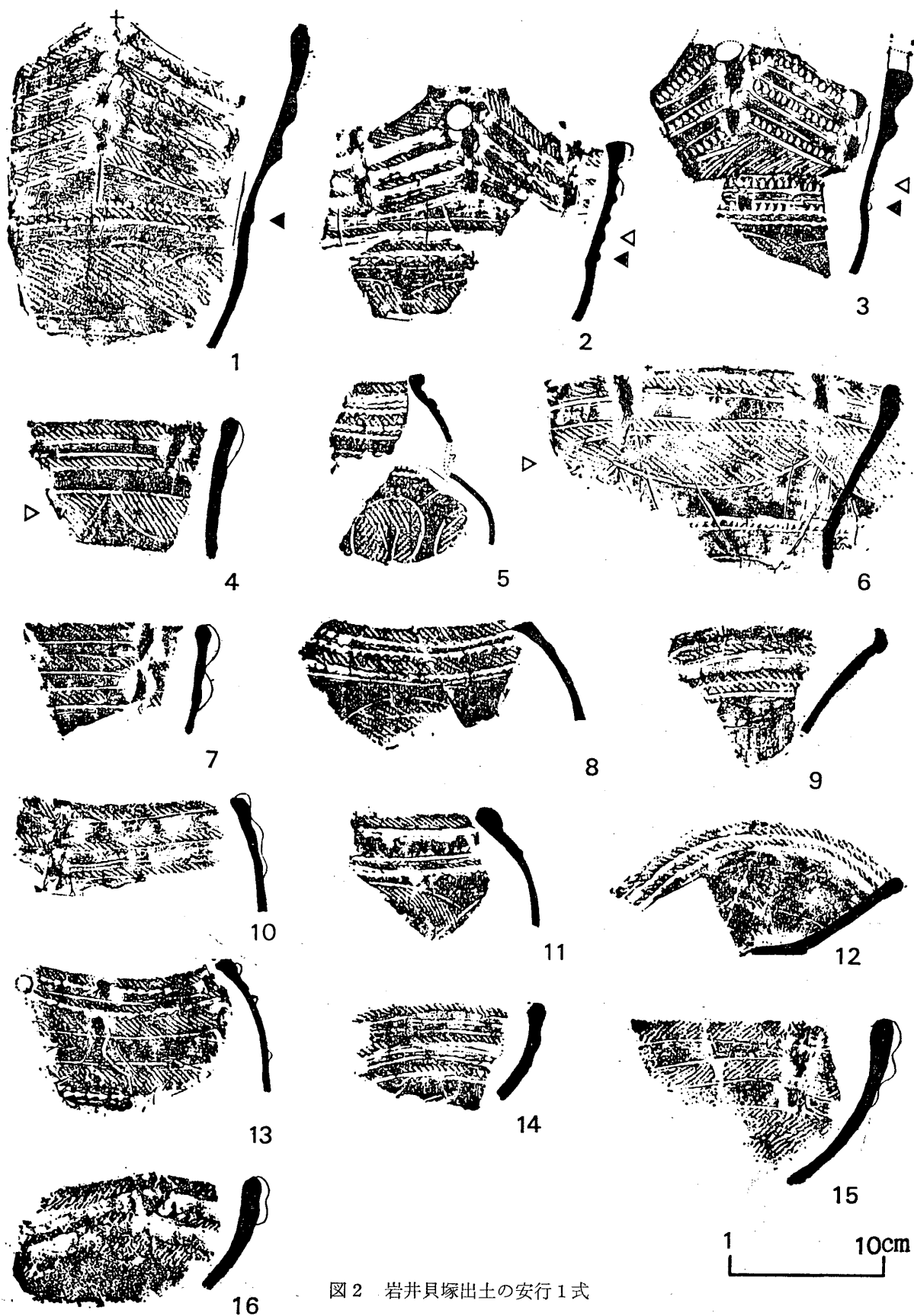


図2 岩井貝塚出土の安行1式

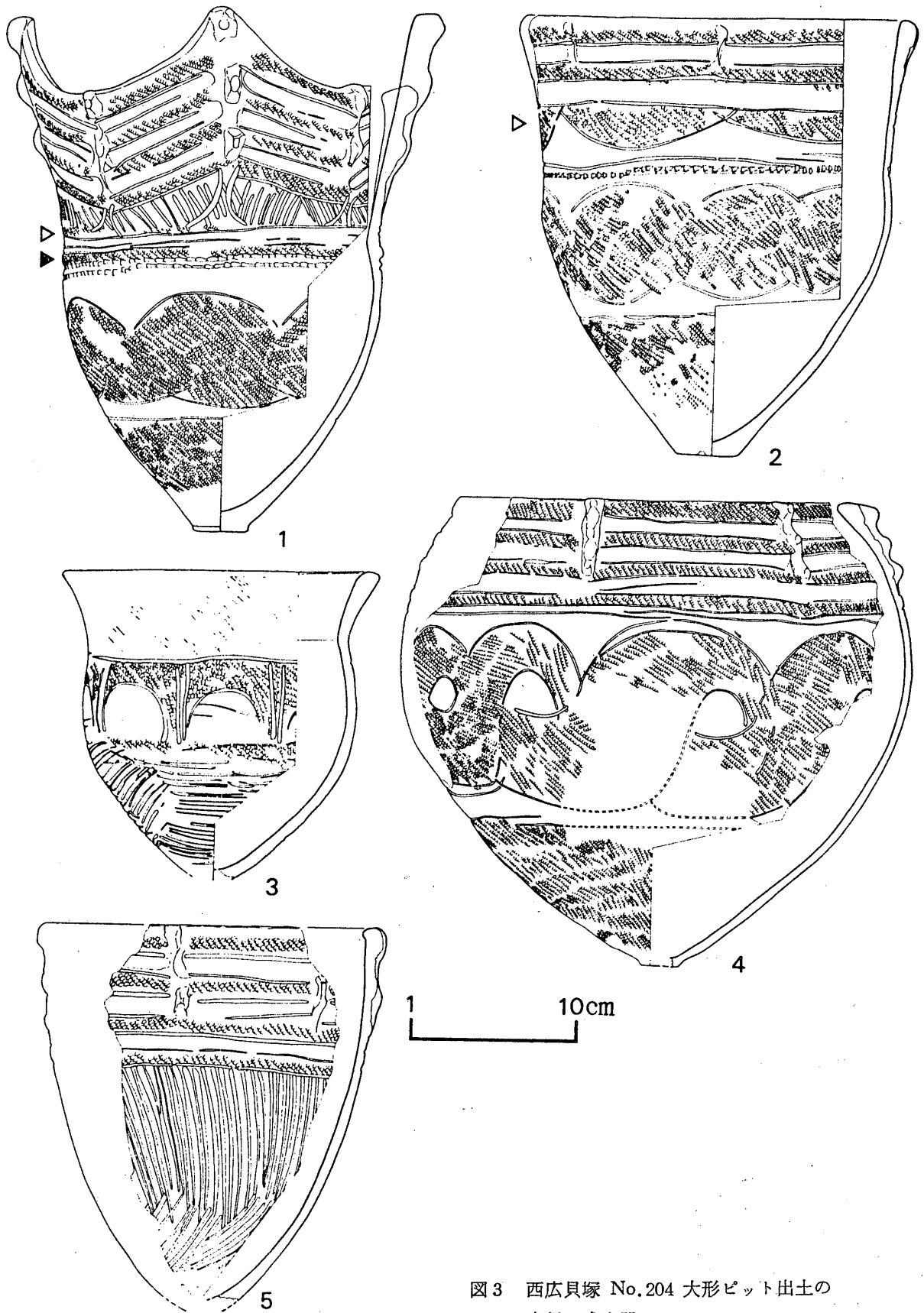


図3 西広貝塚 No.204 大形ピット出土の
安行1式土器

安行 1 式土器型式構造論基礎考

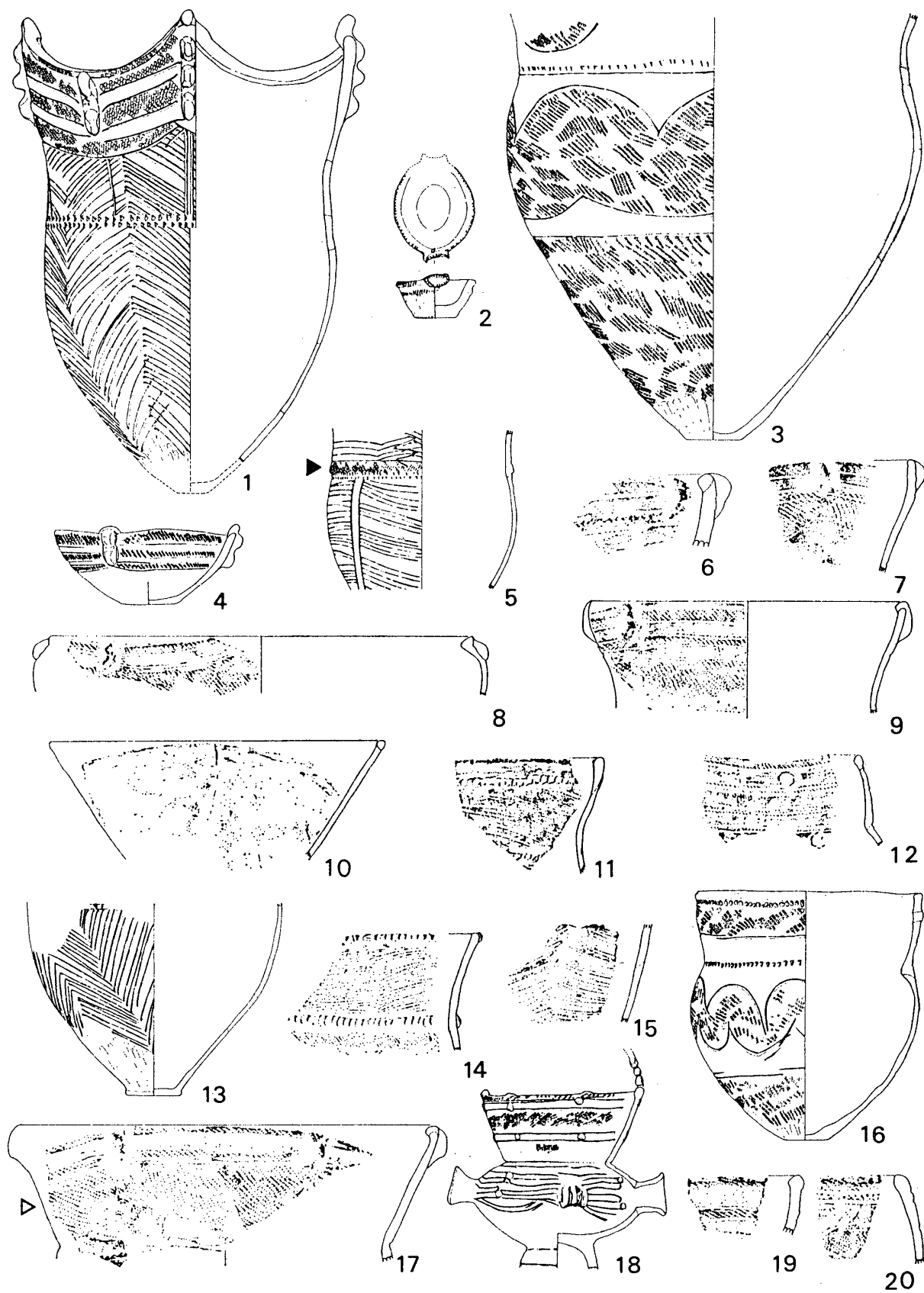


图 4 曾谷貝塚D 4 号住居址出土土器 (縮尺不同)

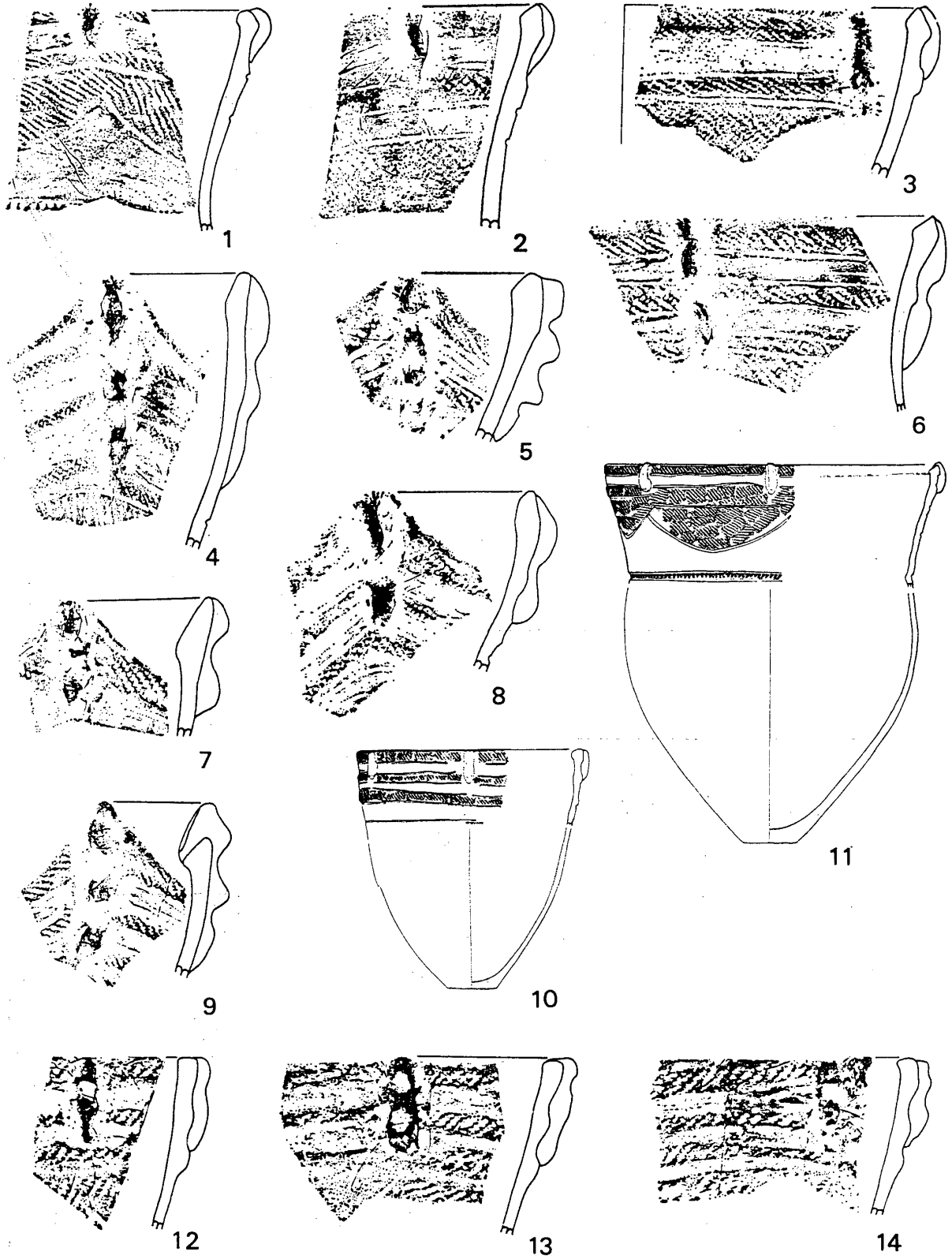


図5 1~11：高井東7号住居址出土土器，12~14：同12号住居址出土土器（縮尺不同）

安行 1 式土器型式構造論基礎考

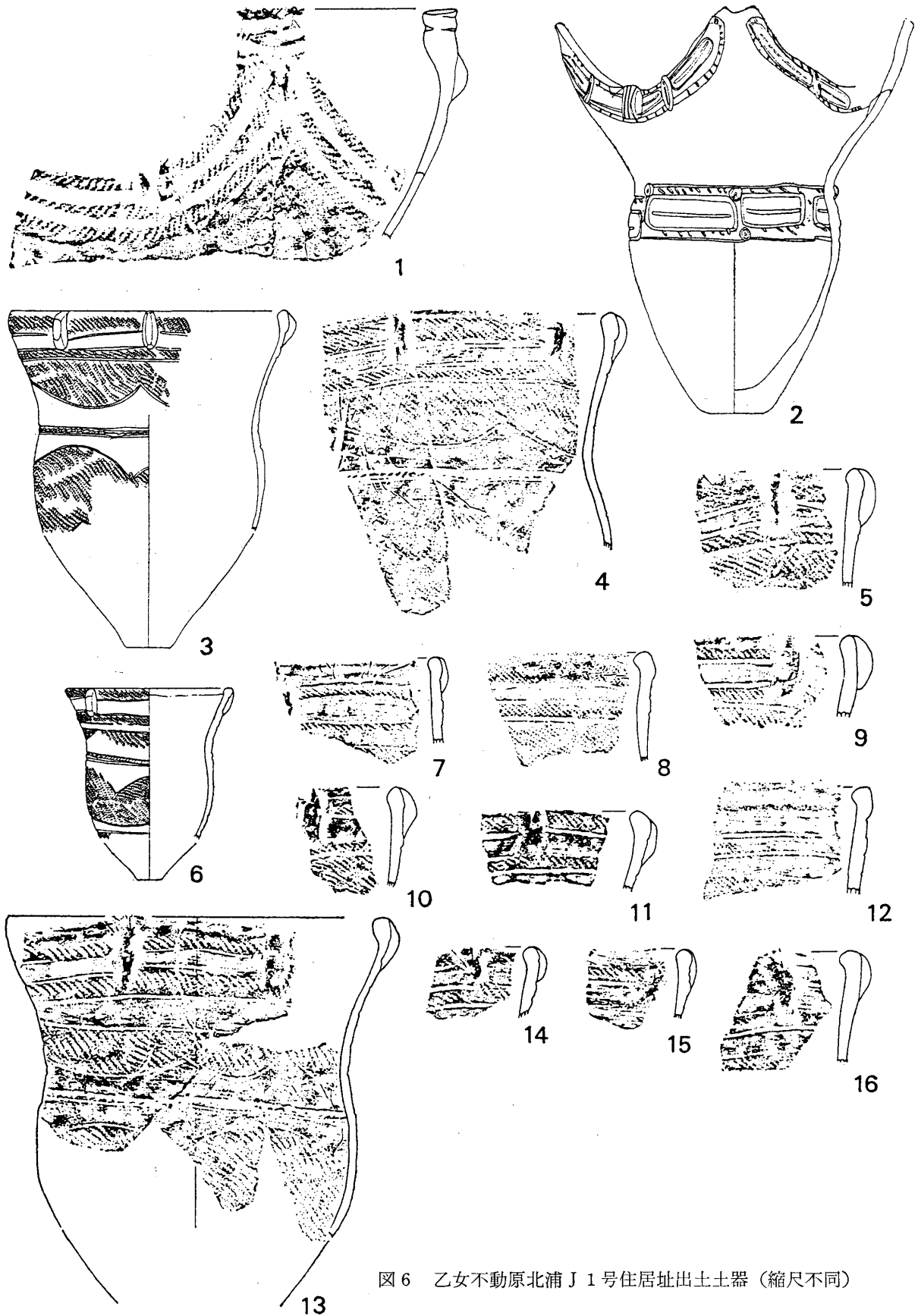


图 6 乙女不動原北浦 J 1 号住居址出土土器 (縮尺不同)

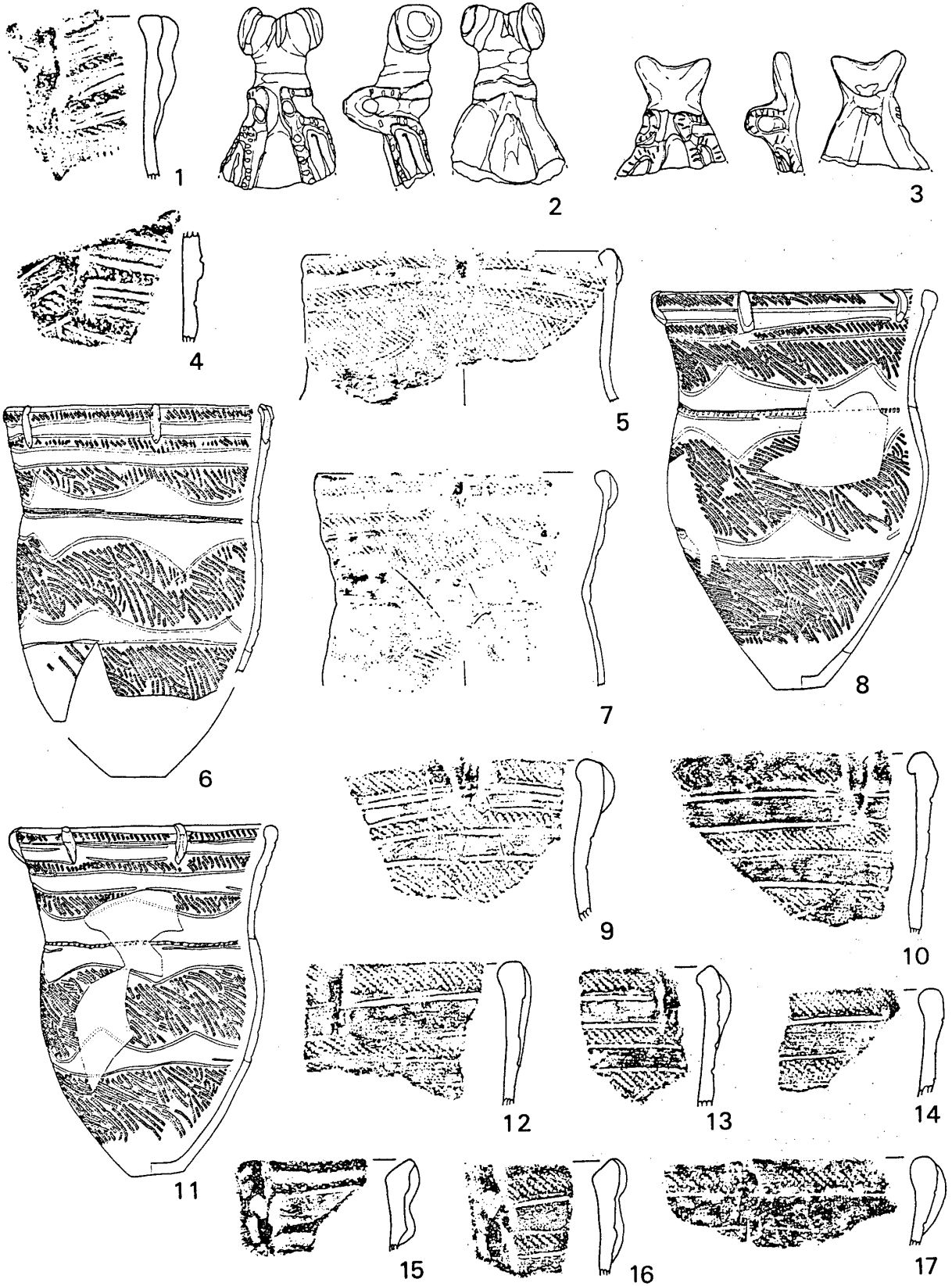


图7 乙女不動原北浦J3号住居址出土土器 (縮尺不同)

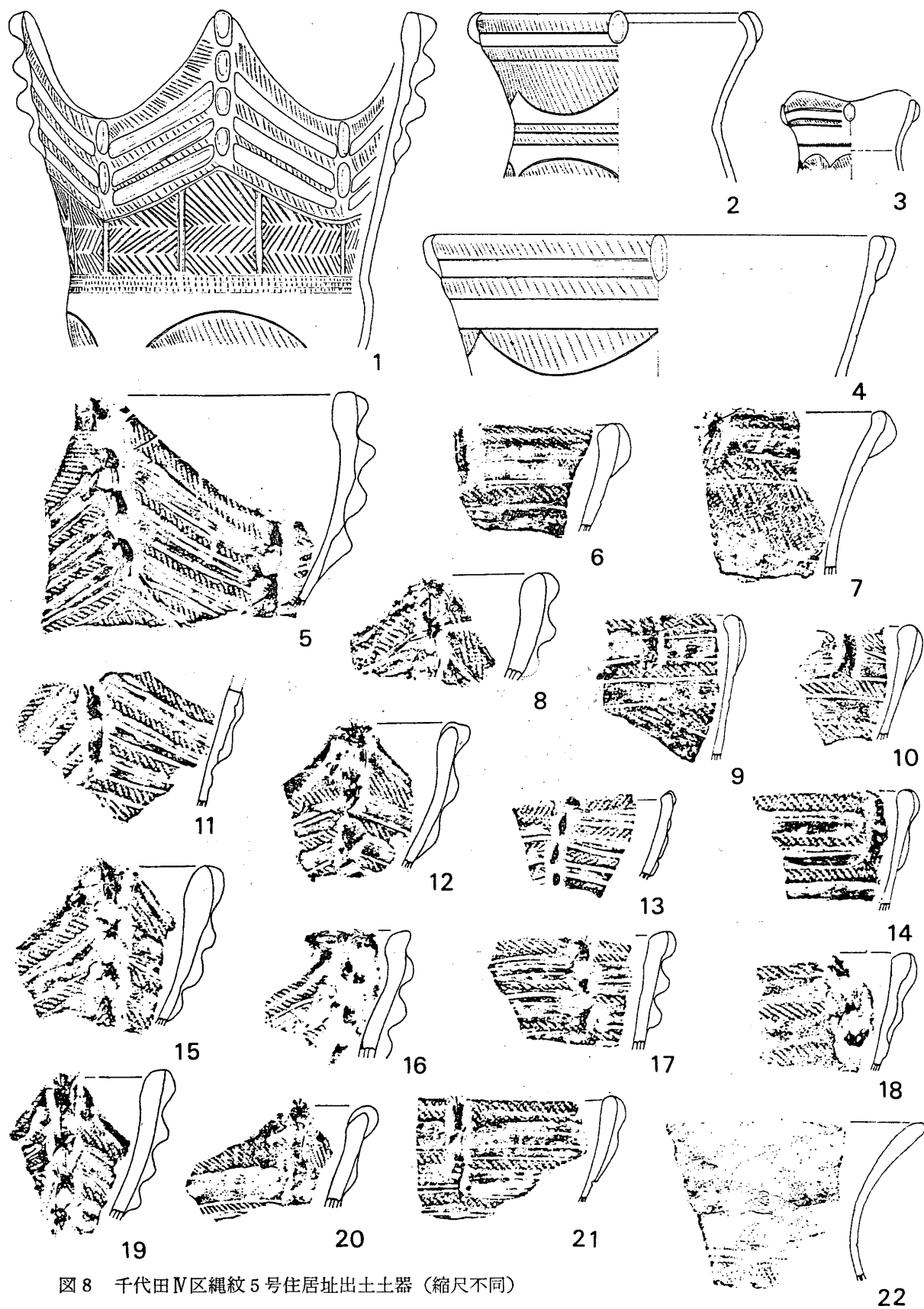


图 8 千代田Ⅳ区縄紋 5 号住居址出土土器 (縮尺不同)

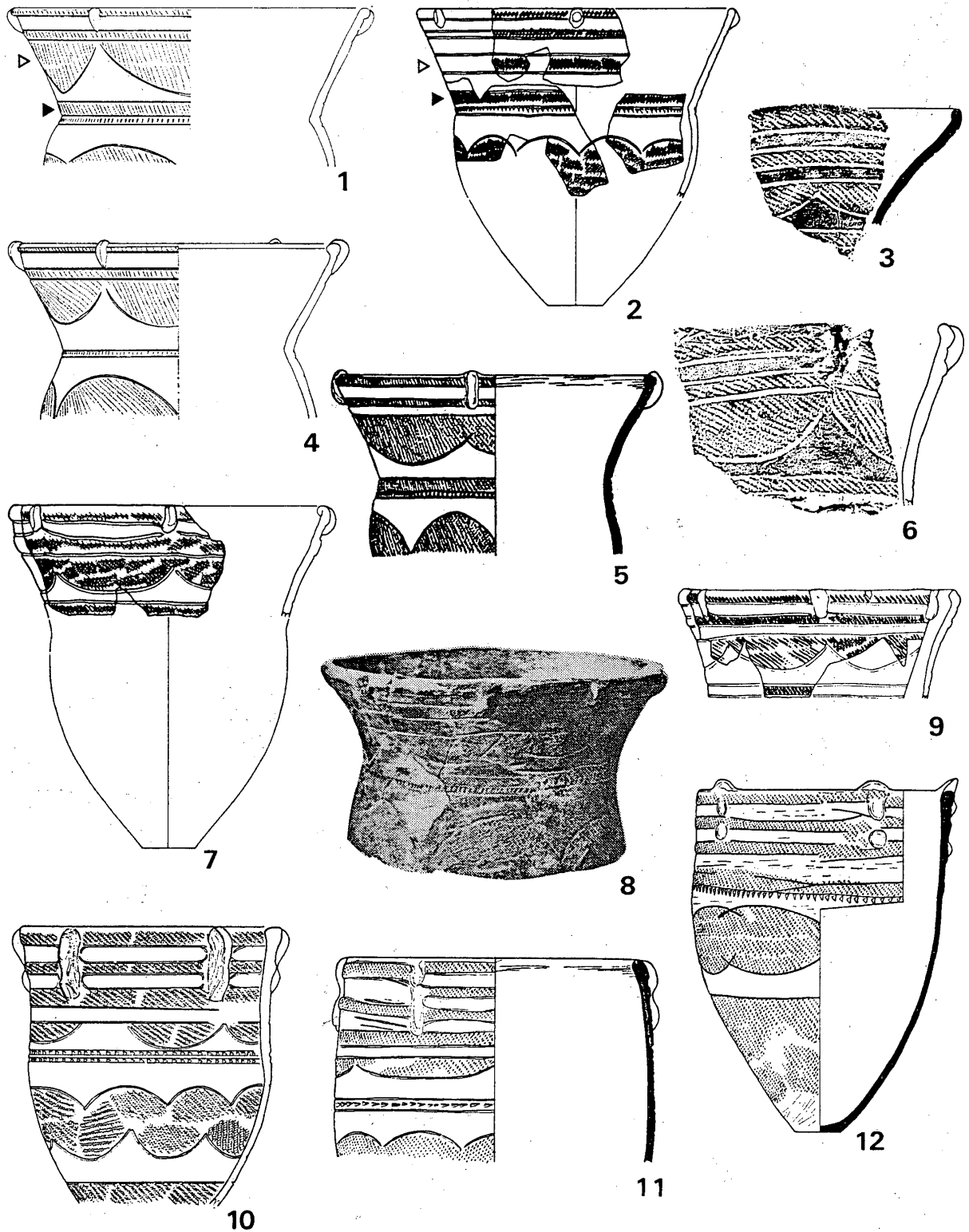


図9 1・4：千代田，2：富士塚前，3：立木F地点，5・11～12：馬場，6・10：中妻貝塚，7：下栢間，8：余山貝塚，9：赤城（縮尺不同）



図10

- 1 : 西広貝塚, 2 : 貝の花貝塚,
- 3 : 馬場小室山, 4 : 大塚,
- 5 : 寿能, 6 : 千代田,
- 7 : 余山貝塚
- 8 : 祇園原貝塚 (縮尺不同)

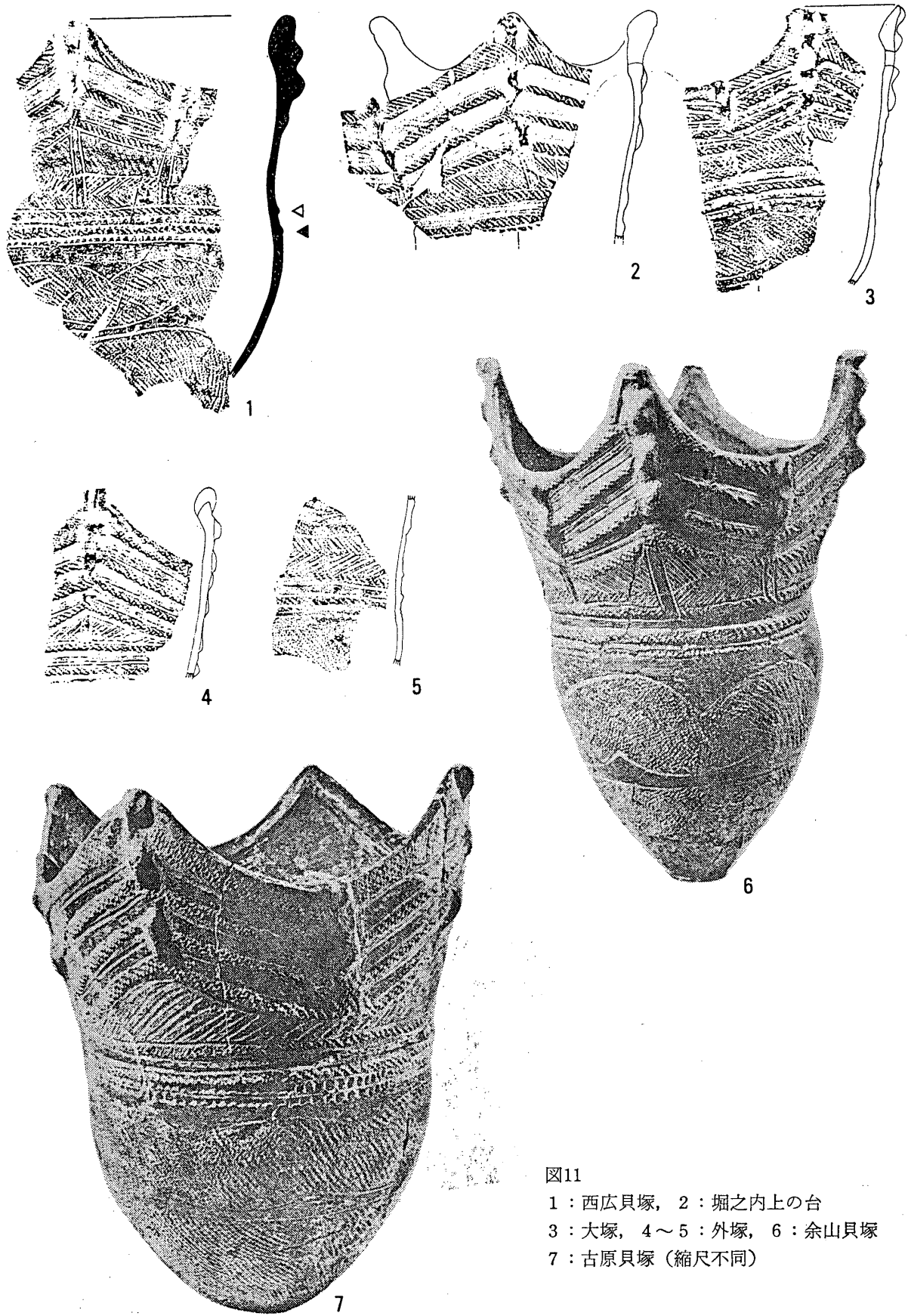


図11
1：西広貝塚， 2：堀之内上の台
3：大塚， 4～5：外塚， 6：余山貝塚
7：古原貝塚（縮尺不同）

安行 1 式土器型式構造論基礎考

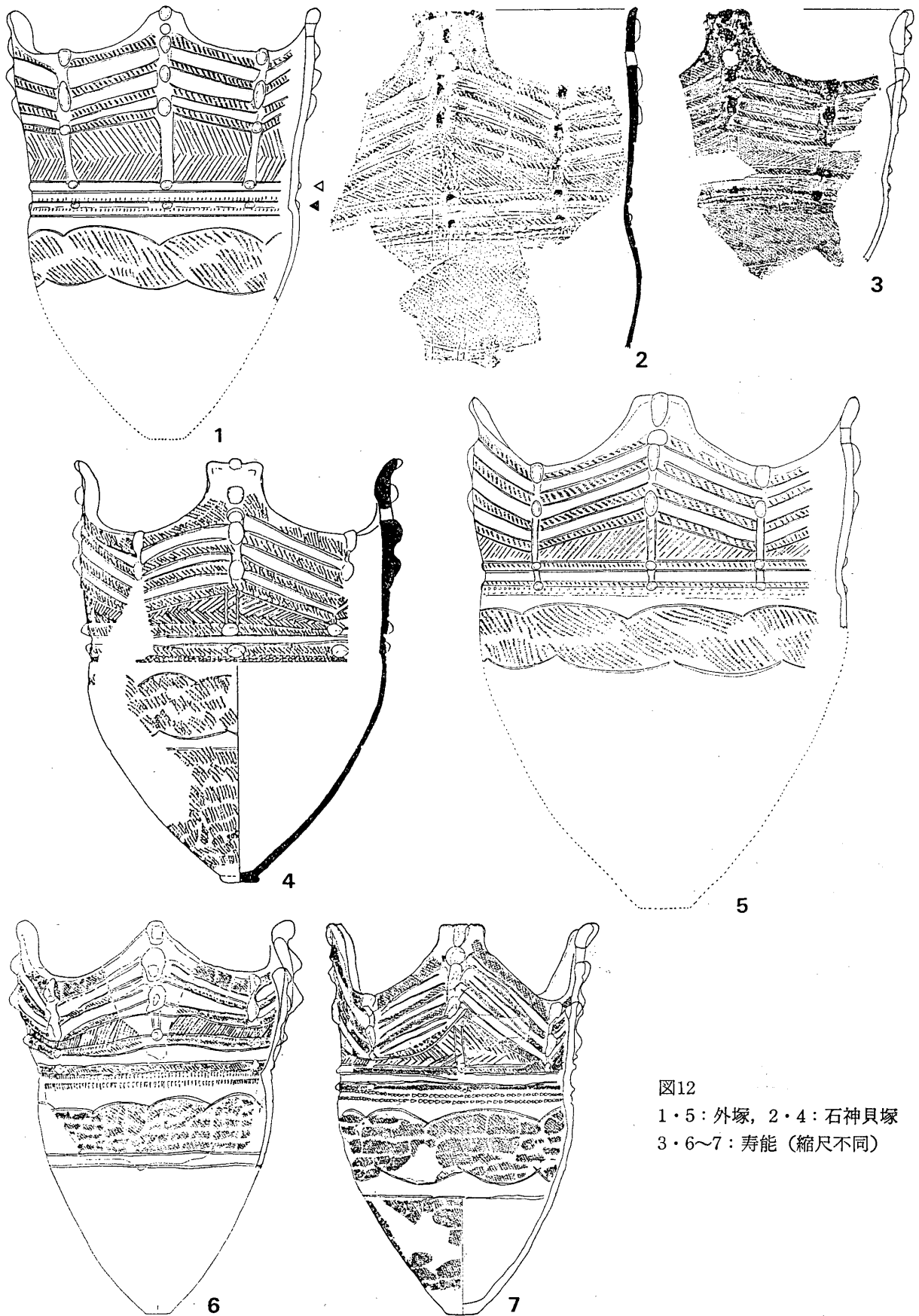


图12
 1·5：外塚，2·4：石神貝塚
 3·6~7：寿能（縮尺不同）

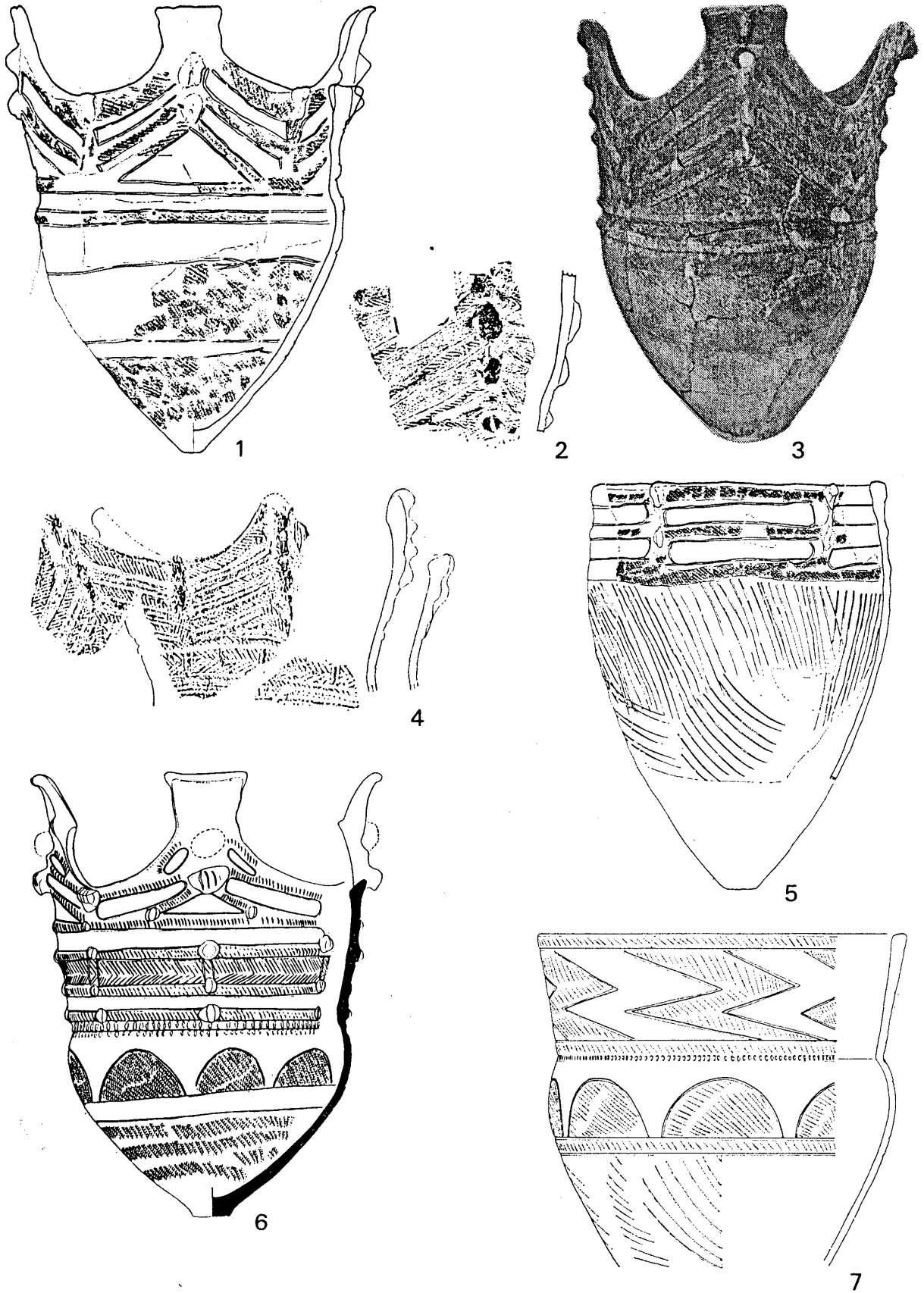


図13 1~2・5：寿能，3：石神貝塚，4：吉祥山，6：小深作，7：千代田（縮尺不同）

安行1式土器型式構造論基礎考

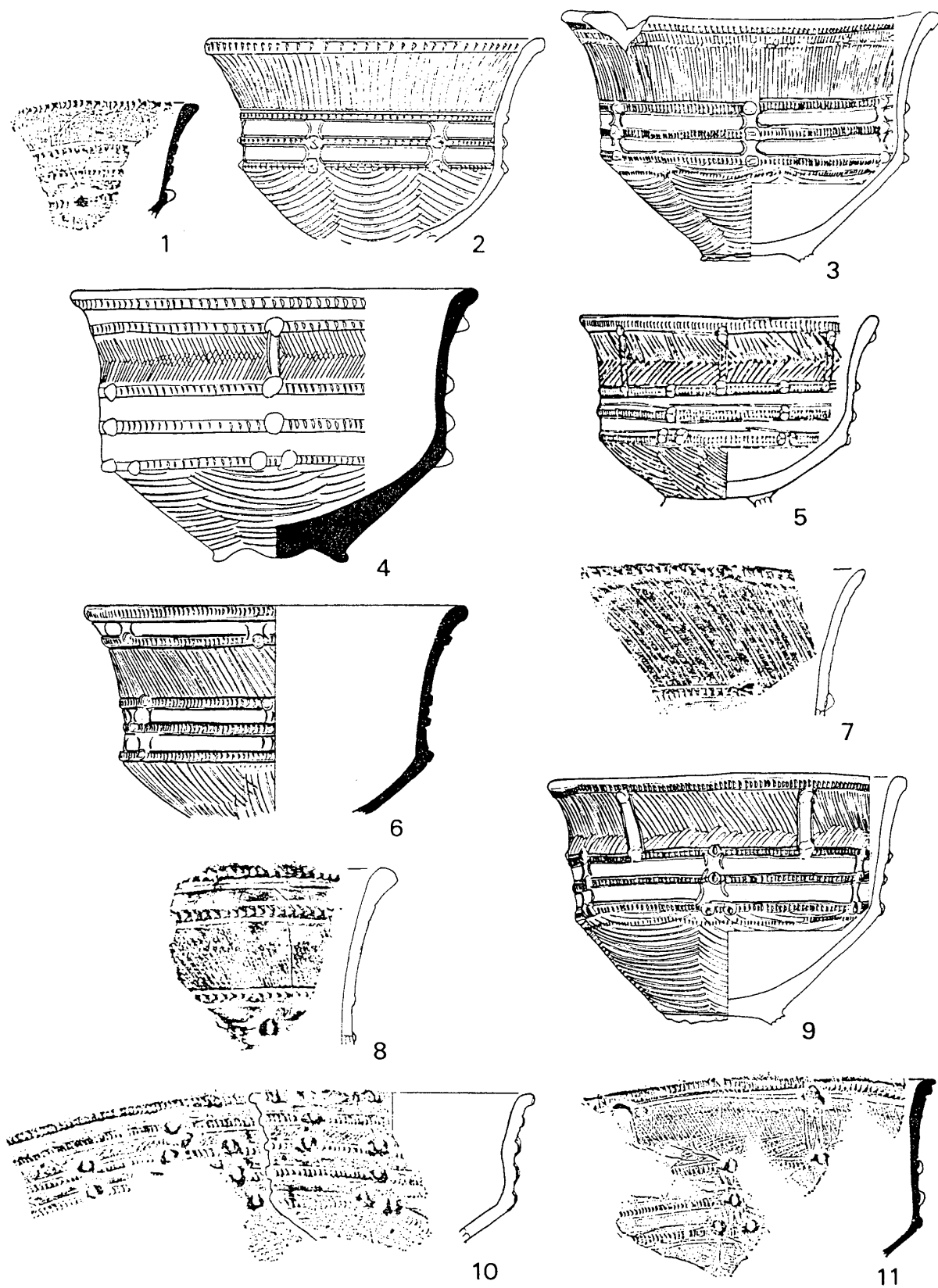
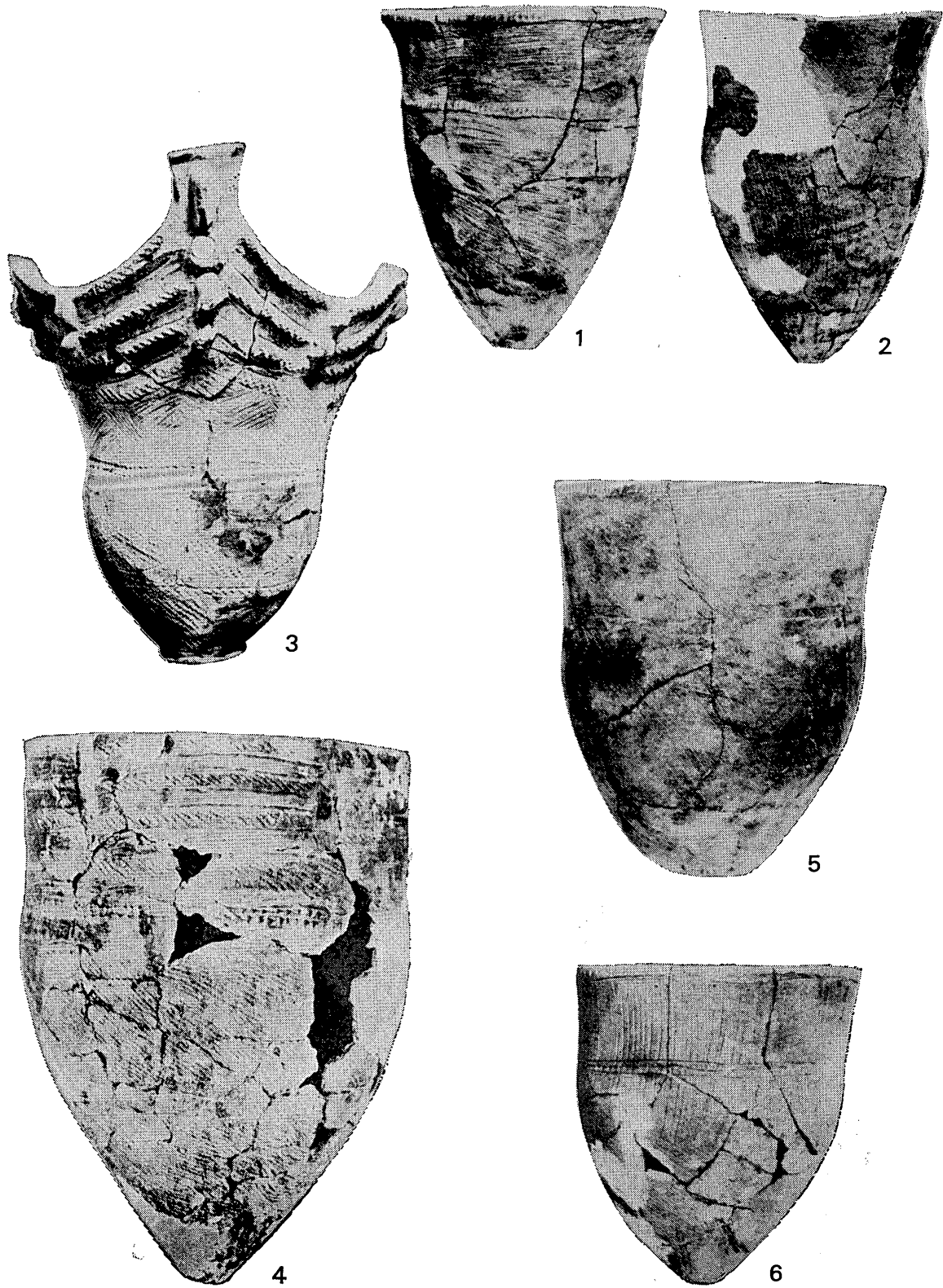
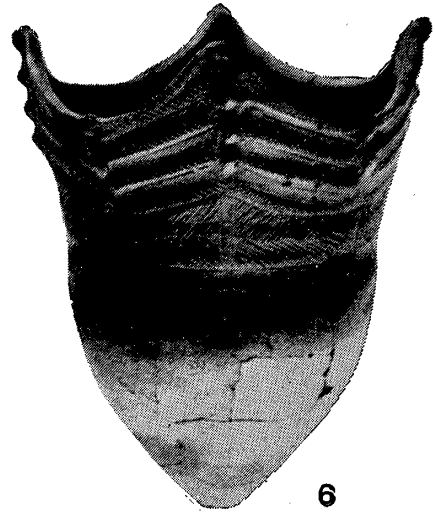
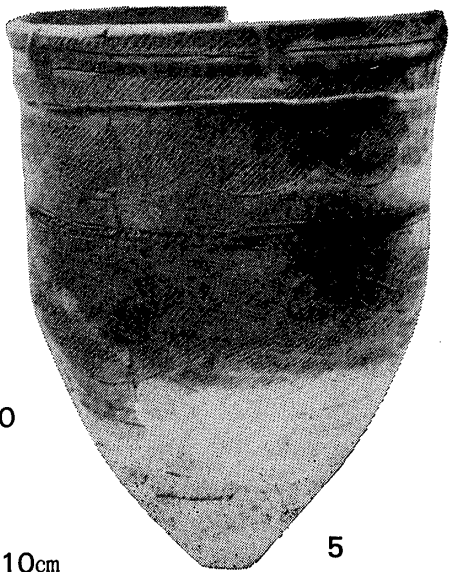
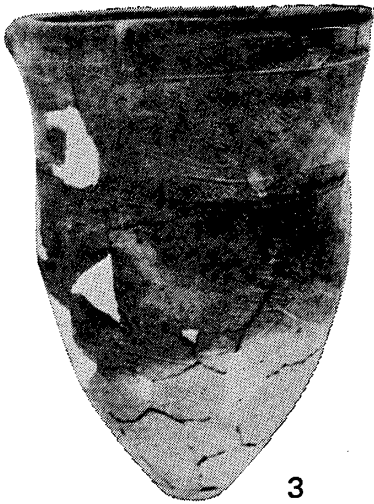


图14 1・11：石神貝塚，2：中妻貝塚，3・9：小山台貝塚，4：小深作，5：吉見台，6：馬場
7：Loc.39（八代玉作），8：千代田，10：馬場小室山（縮尺不同）



1: 遠部貝塚 2: 広畑貝塚 3: 犢橋貝塚 4~6: 岩井貝塚



西広貝塚出土の安行1式土器